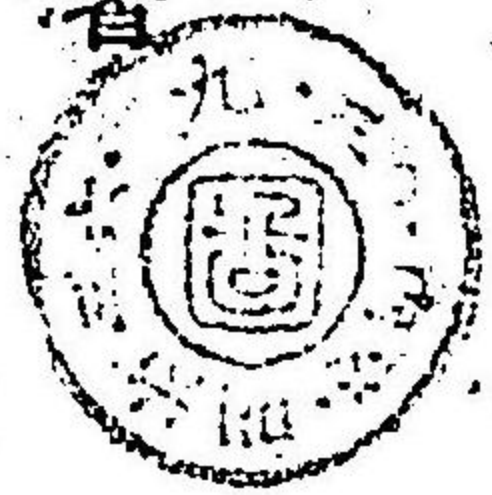




俠 男 兒

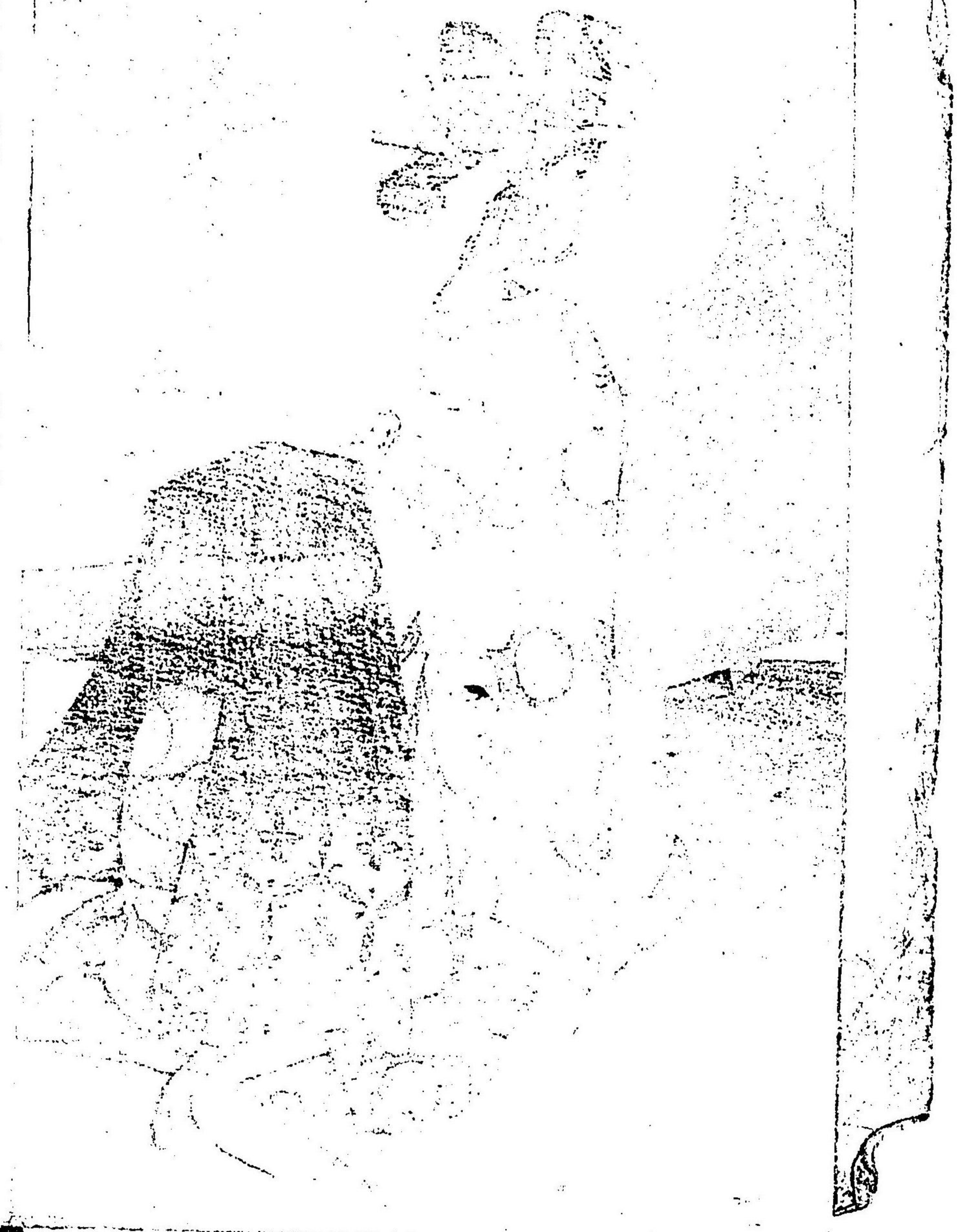
其一 時雨の茶碗

奴の助著



夜來風雨聲憎や花いくばくを散らしけむ今朝となりても尙降り歇まず蝶の翼をぬらして軒の點滴淋しく聞えぬ。
「のう兵庫や妾は其方に折入つての頼みがあるが聞いてくりやるかえ」

ところは備前岡山の城内小栗豊前が邸宅の奥深く母家とは遠く離れ常盤木もて四邊を圍へる數寄屋の中より聲あり聲の主



はど見れば年頃三十七八、髪黒く額は富士を形取り、口元固くしまりて稍、いかつげなれど、絶えず露を含める如き眼元に云ふに云はれぬ愛嬌ありて、人を惱殺するの力あり、小太りに水々として背も高く、色の黒さが一つの瑾なれど、其れさへ白きものを塗りたれば取立て、目には立たず、年には若やぎたる、今様の衣若て、开を隈取れる如き襟筋、これ見よがしに脱襟したる、右より見ても左より見ても、昔時は什麼と思はるゝ女なり、

「はア、何かは存じませぬぞ、母者の仰せど御座れば」

双手を膝に畏まつて、昵と相手を見上げしは、身の丈高く骨太く、兩眼重瞳にして、光沢々としたるが上に、口元しまり鼻筋通り、額は豊に高く、廣く而も色飽まで白き美丈夫なれど、惜しや右の眼の下に小豆大の黒子あると、黒漆のやうなる鬚の毛の波のやうに縮れたる二十一、二の武士なり、

「もしこの事其方が聞いてくりやらねば、妾は妾は自害をして死ぬか、邸宅を出るかの、一つ二つ、所詮おめく、父上にお目にかゝらう顔はなす」

重ねて念を押す母が言葉に、此方は思はず眼を睜りて容姿を改めぬ、

「はア、何うやら容易ならぬ事のやうに覺えまするが、よし如何なる事にもあれ、母者仰せとござりますれば」

「能う云うて頼母つた、されば何のやうな六ヶ敷いことにても」

「なか／＼、兵庫身にかえまして」

兵庫は断然として云放ちぬ、さて母は何なることをや云ひ出づるならんと、尻ど其口元を瞻りつゝ、

彼方は膝押進めて小聲になり、

「他の事でもないが、う、小枝が思ひもよらぬ過失してのう」

小枝とは道の兵庫がためには義理の妹この女のためには切つても切れぬ我子今より十餘年前連子して當家へ後妻に入りしなれば、

「ひゝ小枝どのが、」
我妹ながらも義理ある仲なればにや兵庫は日頃よりお小枝を呼捨てにはせず必らずどのの字をつけて呼ぶが習慣とはなれり、

「過失と仰せられまするは」

「さればい喃、あの白痴が好い年をして、失策も失策小兎のやうな過失をして喃、」

深き溜息吻いて愈々聲潜めぬ雨は蕭々として庭の若葉をぬらし彼は悄然として涙にくるゝなり、

「其方が聞いても必と驚きやらう小栗が家の第一の重寶時雨

の茶碗を彼の子が割つて喃、」

「なに時雨の茶碗を」

兵庫も思はず眼を丸めぬ、

「さればい喃當家のためには唐土傳來の重器とやら且つは當家の物であつて當家の物ならず君よりお預り申せし品も同じものとやら若し此品を紛失するか破損するかすれば小栗の家は断絶とまではゆかずも殿様より重きお咎めを蒙るは知れたこと、」

彼は袖口もて涙を拭ひながら、

「それを彼の阿呆が昨日の夕暮替りの琴を出すどて土藏へ行き、不圖棚を見れば二重の箱入にして恭しく安置してあること豫て聞く時雨の茶碗なれど有らうことか有るまいことか、密に其箱を取却して中を開けて見たとい喃、」

「ム、なる程」

「唯そればかりなれば可いに彼の阿呆めが其れを手に取り上げて打返し、見てゐたと思や、何うした拍子やらハタと板敷に取落して、微塵に……」

何事にも先立つものは涙のみなるが女の習ひ、況して斯る大事を最愛の我子が仕でかせしなれば、最惜しさ餘つて口惜しいやら悲しいやら、彼は其涙止めんと欲して得ざるなり、兵庫もホッと大息吐きて、

「なる程、是は容易ならぬ大事して此事父者に」

「さあ其處で、この母が命にかえて其方に頼みがあるのぢや、彼は涙を拂ひ鼻うちすゝりながら、

「此やうな事を其方に頼んでは重々濟まぬのではあれど、妾は、悲しさやら腹立しさやらで、昨夜通しまんじりともせず思案

に明しました」

いひつゝ、愈々聲を低め膝擦寄せて、甘へるが如く訴ふるが如く、「こゝが折入つての其方への頼み、なんとか良い智恵かしてはたもらぬか、嫌でもあらうけれど、時雨の茶碗を割つた主は私ぢやど引受けてくりやるか……其處を何うなりともして、其方が小枝に代つて父上にお詫してくりやることは出来ませぬか、斯うも云へば本に酷いことを云ふ母じやども思やらうけれど、此處の處を能く考へて頼母小枝は世にも不仕合せなもので、六歳の年に生の父御に離れ入つた歳まで妾の手一つに育てられ、妾が當家へ嫁付いてからは、お情け深い父上のことゝて、親身も及ばぬほどに可愛惜がつては下されど、其處が成さぬ仲とて、彼の子も萬づに遠慮勝はん、妾は彼の子がいぢらしうて、」

これをや恩愛の涙といふにや、彼が眼よりは幾顆の露の玉、

「昨日も懐劍を提出して自害せうとしたのを無理に止めて置
きましたといふ始末其れに引かへて其方は當家の嫡子切つて
も切れぬ父上のお胤たとい何のやうな過失があらうとも父上
と其方の間に誰故をいふものもなければよしやお怒りは烈
しうても親なり子なり懸てはお詫も叶はうなれど小枝になつ
ては義理ある仲ぢやで爾うはゆきませぬ第一この妾が父上に
お詫の仕やうもある合す顔もないで喃其方なれば妾が何うともお
詫の仕やうがある本に世の中は六ヶ敷いもの此處の道理を汲
取つて其方と小枝とは日頃からさついつい仲悪ではあれど男と見
込んで妾が一生のお願ひでござんすはとに小枝と妾を助けて
は頼母らぬか」
詰りは我子の犯せし罪を繼子に被れとは云ふなり、

其二 日頃の俠氣

父祖傳來の重寶我品にして我品ならぬ名器を一朝にして打割
りしこと事容易に似て容易ならぬは當時の習ひ若し上に聞え
なば輕くて閉門謹慎重ければ追放切腹にも處せられん程の一
大事なれば兵庫も太く蕪き默然として母の言葉を聞了りしが
人に頼まう事にも事にこそよれ斯る大事を仕でかせし妹の罪
を此身に被りくれよとは我を男と見しかは知らぬと餘りとし
ても我身勝手なる母この身は如何になりても妹だに無事なら
ば好しといふか家は如何になりても其身親子の身にだに事な
くば可なりといふかさりとては不埒の心懸なり、
兵庫一たびは心裡に斯く思ひはしたれど更に熟々思ひ直せば、
繼母なれども浮世に數多き女の如くならず内心は兎も角も表

面は繼子の我を當家の嫡子先妻の愛子と露聊かも疎にはせず、十餘年の長の月日を妹と此身の間に兎の毛ほどの別け隔てたになく、生の子同様育てくれたる恩は海も淺く山も低かり、されば日頃から繼子の我を悪かれと思ふほど鬼々しき人にもあらぬに、是非に妹の罪を身に引受けくれよとは、情もよくくゝの事ならむ、并を否むは義者の成さざる處、武士の潔しとせざる處、況して臆したるに似たるをや、

元來心清きこと玉の如く些のヒガミ心もなき兵庫は、忽ち妹小枝の罪に代るべく決心したり、彼が日頃の俠氣は此時むらぐと胸をついて、胸を反らし肩を貸かして、事もなげにカラ／＼と打笑ひぬ、

「何事かと思ふたりや、高が茶碗一つ、其れが小枝の命を掛けがへには、埒もない時雨か驟雨かは知らぬが、もどが土で製

した茶碗、古いが貴いなりや、猶ほ可笑しい、母者其やうな事は心配無用になされ、兵庫必と引受けまいた」

「ゑッ引受けてくりやるか」

母は兵庫の顔を見詰めて、此度はハラ／＼と嬉し涙を流しぬ、

「あゝ難有い、其れで妾はモウ蘇生つたやうな氣がします、然し喃兵庫其方も知りやる通り、父上は大のお氣短、萬々其様なことはあるまいと思へど、若し此事で其方の身に大事があるやうなれば、其時こそは此母が、屹と命にかへても其方悪しうは計らひませぬ」

「は、其れほどの大事でもござるまい、高が茶碗一つでござれば、今にもあれ、父者の御飯宅あれば、某立派に申し開きして見ませう、よし日頃の御氣象にもわれ、人と茶碗其れほどの輕重御存じなき父者ではない、當番中では智者と呼ばれ、父者所謂る案

十二
「はるより生むが安いとやら申して」
實に案じるより生むが易きなり、斯くも容易に承引けは呉れま
じと思ひし兵庫の、最と易々と承引けたるに、繼母は漸く胸のつ
かへを下せし思ひ、

「其れでは何事も其方に任しますはとに頼みましたぞへ」
「はア頼まれまいた、確と」
ニコリと打笑ふ兵庫、元來氣高く見ゆる男の、此時は一入神々し
く見えて、繼母は思はずも繼子が威嚴に打たれぬ、

其三 主將の法

たどひ水聲鳴直つて渦巻く中なればとて、炎々天を焦して燃上

る火の中なればとて涙もろとも人に頼まれては前後の思案は
先づ措置き、一語と共に飛込みかねぬが兵庫の平素の氣象なり
彼が未だやう／＼十一歳のむかし、同じ年頃なる手習朋輩の不
圖せし出来心より人の悪を盗みしに、忽ち此事露見して師の耳
に入りしかば、盗みし少年は如何なる切檻や受けんと怖さ恐ろ
しさに縮み上り、人なき片隅に身を縮め、前非を悔いて泣きゐた
るを、兵庫見るより何事と聞き、彼が泣音の中より救ひを乞ふを
見てよしとばかり、其まゝ大膽にも師の前へ出で、盗みを爲せ
しは我なり、早く相當の成敗あれと名乗出でぬ師は盗みしもの
の兵庫にあらぬを知れど、彼れ自ら他まで云張りて動かねば是
非なく、心中深く兵庫の義侠に感じて、詮義を見合し、態と盗みし
少年に聞えよがしに、兵庫に従來を戒め諭して事やみぬされば
此少年今も尙ほ當時の恩を忘れず、逢ふ人毎に兵庫の義侠を語

りて寝めたいへ、一朝兵庫の身に事あらば命にかへても此時の
 恩に答へんと誓ひぬ、
 事の軽重難易己が身の利害得失は暫らく問はず、一旦人に頼ま
 れては金輪奈落後へは引かぬ兵庫、船母に對しての一語を重ん
 じて我身の利不利を願はず、其夜父豊前が飯宅を待つて側近く進
 み出でたり、
 豊前は取る年五十六、色黒く骨硬く見上るばかりの大男にて飽
 まで濃き眉と眉との間の狭きは自と痢癖の相を現し、人と對座
 する折には絶えず肩を掉るの癖あり、
 「な、兵庫か、近う寄れ、朝から小歌ない春雨鬱どほしいことぢ
 やの」
 豊前は極めて機嫌よげなり、
 「誠に能う降ります、この様な鬱どほしい日も終日のお勤めで、

御苦勞に存じます、
 「は、勤めは若い時からの習慣ぢやで少しも苦痛ではない、な
 れども此頃は年の寄つた故でがな、兎角に物に飽きやすい、最う
 少しは五牀にヒッが入つたと見えるわ」
 彼はカラ／＼と打笑ひて、自らつぎし湯呑の湯を呑干しながら、
 「今年一杯辛抱して、來年は汝に家督を譲つて予は隠居ぢや、小
 枝も其内には好い縁邊もわらうで」
 いひつゝ己が腕を打返し／＼眺めながら、
 「駿馬も老いては駄馬に劣るは、天晴れ剛と云はれた此腕も、太
 う瘦たでノ」
 「いや左様に目にも立ちませぬ」
 兵庫は氣のない返事をしながら、昵と父の顔を見上げつゝ、膝を
 刻みて、

「時に父者兵庫些と父者に伺ひたい事が御坐りまするが……」

「ほウ甚麼ぢやノ改まつて」

「他でも御坐らぬが凡そ人君たるもの如何なる心懸が大事で御坐る兵庫後學のために伺ひまする」

豊前は眉を皺めながら、

「敷から林のやうな質問する事は新しういふまでもないわ、人君の道は人心を得るにありぢや、三略の冒頭に甚麼とある、主將の道は英雄の心を攪るにありとは、は、何故其の様な事を聞くノ」

「成程されば父者荷くも一國一城の主將たるもの、乃至士大夫の家の主人たるものは臣下の心を攪るを以て第一としまするか」

「先づ爾うであらうノ」

「されば父者如何なる珍器珍寶と雖も臣下いや人の貴きにはかへられますまい」

豊前は軽く打笑ひて、

「いふまでもない、珍器珍寶は太平の資物、いざ鎌倉といはう時、寶が打物とつて敵には向はぬわ」

聞くより兵庫は占たと心に打笑みつゝ、

「父者ッ」

一際勵ませし聲に豊前は驚きて稍々反身になり、

「る、静にせい聲はぬわ」

折しも次の室に徹に衣の摺合ふ音して、何者か親子の物語を立

聴くものありとは父も知らず、子も覺らず、

兵庫はさらぬも氣高き顔を屹と正して、双手を支へて父を見上

げつ、

「父者某近頃申譯もない不都合を働きました」

「なんぢや不都合働いた」

豊前は眉を顰めて額を差出しぬ、

「はッ、當家の重寶殊に父者の秘藏せらるゝ時雨の茶碗を割りました」

「ナニ時雨の茶碗を割つたッ」

さッと老の面上に紅を潮して早やありくと見ゆる額の青筋

「誠に相済みませぬ質は今日某土藏へ入りまいて書物を出さうと致いた折不圖茶碗の箱が目につきまいたで、何心なく中を見る氣になつて取出しまいた」

「ト、取出して何うしたッ」

「はッ、成程何時見ても結構な品と打返しと拜見します折

柄誤つて板敷へ取落しまいて三個ばかりに」

「やア、ミ、三個ばかりに打割つた」

豊前は思はずホッと太息吐きて我子を睨み詰しが、懸て嚴めしき聲もて、

「こりや兵庫只割つたで済むと思ふか、事新しう云ふまでもないが、あの茶碗は唐土傳來の名器で當番中にあればその名器持つものは又ない、大守も殊の外お褒めの言葉を下し置かれて例年初のお釜日には當家よりあの茶碗持参してお茶さし上げるが家例のやうになりぬるは其方も知りつらう、其れを唯誤つて割つたで済まうと思ふか」

「はッ」

「七ッ八ッの小兒ならば知らず早や二十一歳といふ見事な男になりながら、來年は家督相續して御前をも勤めう身がッ、其

様な白痴た心で重き御役目が勤まらうと思ふか、不持者ゆがさ
 わ其茶碗元にして戻せ元の通りについで戻せッ」
 満面火のやうに赤く肩を揺り動かし、両手もて火鉢の縁を叩き
 ながら喚き立つる大聲斯る痲痺者の癖として一たび怒り心頭
 を衝いては前後の思案もなく一旦割れたるものゝ元にならざ
 るは知りながら飽くまで無理をいふなり、
 「さあ疾うく元の通りにして戻せ立派に元の通りにして戻
 せッ」
 恐れ謹んで額を畳に摺り付くる兵庫を睨み下しながら叫んで
 止まず、
 「父者」
 兵庫は屹と頭を擡げて容姿を改めぬ、

其四 太平の贅物

唐土傳來の名器は愚かよしや世界無二の珍寶にもあれ高が土
 で製したる茶碗一個何程の事かわらむ斯る無用の長物あれば
 こそ過失をなして罪せらるゝ者もあるなれ最初より斯る物な
 からんか天下は太平一家は安然なりとは兵庫が血氣の胸に深
 く思へる一事さればこそ電雷の如き父が怒りの聲火のやうに
 熱したる父が憤怒の面色少しも恐れず彼は両手を膝に屹と容
 姿を改めてこの重瞳の眼もて父を見上げながら聲涼しく、
 「なる程貴重茶碗を割りましたは如何にも某が重々の不届
 なれども父者一たび割れたるものゝ再び元にならう理はござ
 らぬ某の過失は過失にござれど云はゞ茶碗は時が来て壞れた

と申すもの」

半ば云はせず豊前は戦慄して益々痲痺の度を昂めて、

「黙れ、エ、黙れ云はして置けば父に向つてナ、何といふ言葉ぢや」

「はッ、恐入ります、お言葉返して重々恐入りますなれども、凡そ物の理に二つは御坐りませぬ、父者前に甚麼と仰せられまいた、主將の法は英雄の心を攪るにあり、荷くも一城一國の主將乃至士大夫たるべきものは人を以て第一とし、珍器珍寶の如き太平の贅物は願るに足らずと仰せられまいたでないか、これが某の過失でござれば去るお腹立も然るべきかなれど、若し家來の者が致いた過失ならば矢張り其様に御腹立でござるか、事と場合によれば僅か一個の贅物のために大切なる人命にも及びませうで、斯くては君子の道ではござるまい」

兵庫は其氣高き顔を一入氣高く、左右の拳を握りて此方を睨み下す父を見上げつゝ、

「斯るもの家にあればこそ一家上下に安き心もござらぬ」

いひつゝ、袖を探つて取出せしは前にお小枝が割りたる當家重寶の時雨と名付けし茶碗の三つばかりに打壊れたるなり、

兵庫は手を片手の掌にのせながら、

「父者暫らく某が申さう事を聞いて下され、今天下太平と見え、ますれど、神君の御武徳もて大阪を降し給うてから天下未だ其血腥い風が吹き吹みませぬ、大御所様は駿府に上様は江戸に暫らく太平の風枝も鳴らさぬやうには見えませぬ、太閤恩願の武士が遙に千代田の御城を睨み上げてゐぬとは申されませぬ、東北に最上加藤西には福島島津一朝事あらば彼等は上様お味方とは申されぬ、勝つて甲の緒をしめよ、とは今の天下を申すの

でもござらう、されば何人にもわれ今斯る無用の長物を愛玩すべき時節ではござらぬ、斯るものゝ爲にあたら人心を失ふことを某はム、無念に思ひまするで」

彼は屹と身を斜に掛へ、片手を差伸べさまに火桶にさしたる火箸を抜取るが否や、

「斯るものは後のため、まッ此通りッ」

突然この茶碗をピシリッ只一打惜しやさしもの名器微塵に打壊れぬ、幾個の碎片パツと四邊に飛んで座中に時ならぬ、彼たばしりぬ、

「やわッ、不届者がッ」

豊前は怒りの聲鋭くすつくと起上り、

「己が非を覆はんため、親を親とも思はぬ振舞第一、その賢者振つた口上氣に喰はぬ、最早や用捨ならぬ、ソ、其れへ直れ、手討に

してくれ」

上下何れも人斬庖丁を横ふ、當時の習ひ、人は虎狼の如く、主従親子の嫌ひなく二つ目には血を見んとするうたてさ、殊に痲痺もて國中に聞えし小栗豊前は怒りに半ば心神錯亂して恩愛の情も前後の思慮もあらばこそ、刀掛の大刀に手を觸るゝや否や、ズラリと抜放して眞ッ二つとばかり切下んとする其時、

「あれ暫らくッ」

必死の聲もろども次の間より轉び出でし兵庫が繼母透さず所夫が刀持つ手に絶りて、

「早まつたことを、若し此子が二つになつたら何と遊ばす、後悔は先に立ちませぬぞへ」

云はしも果てず豊前は聲荒らげて、

「やわ、縫か返け、言語同断の不孝者め、テ、手討にするに仔

細ない要らざる止め立て爲にならぬぞ」

又振上げんとする一刀の下、お縫は身をもつて立寒がりながら、

「何事も兵庫が悪いのでござんす能々妾から云ひ聞かしまして

う程に、お刀丈けは、エ、危いと申しまするに」

彼は満身の力を、双手に籠めて所夫の刀を引奪りて、

「これ兵庫サ、早う此處を、父上へは妾からお詫して置かう程に」

彼方へくと願と眼にて追立つる繼母、お縫自若として坐したる兵庫も今は詮方なく、徐に起上るを見て豊前は尙ほ罵り止ま

す
「フ、不届者たどひ母が情けで手討は通れうとも、コ、子でないぞ、今から勘當した汝如き奴は面見も目觸りぢや、疾うく出て行け、七生までも親子の縁切つた」

「あれまわ其様に仰せられずともサ、兵庫此處は妾に任して早う〜」
所夫を諷め我子を追立て彼は額に玉の汗、

其五 落花流水

小栗豊前の痲癖といへば當時備前一ヶ國に誰知らぬものなき名物とはなれり斯る親を持つ子の不幸は何ぞ、元來自ら犯せし罪ならぬ罪に痲癖の父が怒りを受け、悄然として己が居間とする一室へ引退きし兵庫腕を拱き頭を垂れて默然たる折しも隔ての袂静に聞く音して入來りしは妹お小枝、小走りに駆寄りさま義兄が側に身を投出して、

「兄様カ、勘忍して下され」
 彼は我身が犯せし一朝の過失より罪も科もなき清浄無垢の義
 兄をして斯くも情けなく父の不興を蒙らせしを流石に氣の毒
 どは思へるなり其れと同時に餘りに己が身の不甲斐なきと母
 が我身を構ひ過ぐるの過ぎたるを心に恥づるなり、
 兵庫は閉ぢたる眼を開きて冷かに、

「小枝どのか何が其様に悲しいのか」

木で鼻くゝりしとは誠に斯る事をや云ふならむ、

「何も御事に詫びらるゝやうな覺えはないは、は、は、」

片腕を机の上に頬杖ついて空嘯きぬ、

お小枝は取る年十八の色白丸顔取立て、縹緞よきといふには
 わらねど母に似たる眼元の愛嬌露したゝるがごとく起居爪端
 れなんどなく蓮葉に軽々しく上乘の武士が娘とは見えず是等

が兵庫の氣に入らぬ一つにやあらむ日頃より兵庫のお小枝を
 嫌ふこと容易ならずお小枝もまた兵庫の餘りに神々しく氣位
 高きを忌み恐れて近づきかね兄と呼ばれ妹と稱して朝夕同じ
 家に顔は合せど心は宛がら敵國の人の如く兵庫は面と向つて
 お小枝を嘲りお小枝は蔭へ廻つて兵庫を罵り所謂犬と猿寄
 れば必ず眼に角立て、睨み合ふが常なり、
 不思議や斯る仲悪き人のために其罪を着て天にも地にも只一
 人の父が不興を蒙りし兵庫こそ奇怪と見れば奇怪なれどこれ
 を生れて俠骨稜々たる兵庫の兵庫たる處彼は義のためには愛
 憎嫌悪なく一たび人に頼まれては敵のためにも身を粉に碎く
 が持つて生れし身の疾病なり、
 されど女は心弱きもの萬に泣き易く笑ひ易く物に當つて怒り
 易く感じ易きが習ひなれば己が割りたる茶碗のために斯くま

でも其人を苦しむるかと思へば、お小枝身に泌々と兵庫の義俠嬉しく、昨日までも今日までも顔見るさへ腹立しと思ひし其人の、今は何とやら懐かしく慕はしく、無情く云はるれば云はるゝはどいとい思ひは増鏡幾度か己が姿をうつして鬢のはつれさへも氣にしなから、心一杯の禮いはんものと借こそ此處へは來りしなれ、知らず戀といふもの斯ることより芽さゝすやは、お小枝は無情なき義兄の顔を下より泌々見上げて、頬には紅葉眼には涙の露華、

「これ兄様さぞお腹も立ちませうなれど、勘忍して下され、此様に兄様を苦しめうとて母様の頼まれたではないに、本に恐ろしい父上の御痢癩恚慮ことにならうと知つたら、最初から兄様には頼みませぬものを、たとひ妾の身は何うならうとも思へば、今更ら母様が怨めしうござんす」

彼は義兄の膝に絶りて泣くなり、
「決してゆめ更らく、妾の悪氣ではござんせぬ故、悪う思はずに妾は、此御恩シ、死でも忘れませぬ」

心から底から心に有りだけの眞實をさらけ出して謝したるなれど、笑止や相手は豆腐に錠煉に釘のそれよりも猶便りなく、
「は、固より悪氣など、は思ひませぬ、此處サ來られた用事は、只其れだけでござるか」

唯其れだけの用事ならば早く此處を立去れと云はんばかり、
「兄様何卒何卒怒らずに」

さらぬも愛嬌滴る眼に涙を漲らして下より昵と見上ぐるお小枝落花かくも情われを流水さららに意なく、

「誰も怒るものはござらぬ」
夏蠅しど顔打反向くる兵庫雨は何時の程にや歌みて庭には春

夜の月明かに、木々の葉末に露きらめきて風なきに折々ホロ
くと玉散りぬ、
お小枝は手持無沙汰に只もぢく、父豊前が居間よりは尙何事
か罵る聲聞えぬ、

其六 武術修業

燈火の蔭に淋しく坐して徒らに疊の塵打捨るお小枝机に双腕
ついて半窓より月明りに庭の花打眺むる兵庫今は互ひに一語
もなく時を移す折しも、

「兵庫や、ぬやるか」

打沈みたる聲もろどもに、密と入来りしは繼母お縫、お縫は奇怪

見 男 俠

俠

男

見

なる此場の体を見て眉打蹙むればお小枝は大海に漂ふ舟の幸
くも島を見付けし思ひ、

「お、母様今兄様にお禮申してゐます處」

お縫は片頬に淋しき笑打寄せて、

「ほんに兄様は御事の爲には大恩人能うお禮云やつたかえ」

いひつゝ、兵庫が方へ膝摺寄せて聲潜ませ、

「のう兵庫、妾は今夜といふ、今夜其方の親切が沁々身に染みま

した、一旦引受けたことを空にはせず、あれ程父上に怒られても

トウ、其身に罪引受けてくりやつたこと、天晴れ見上げた俠

骨、其れに此の阿呆が」

お縫はお小枝をテロリと見やりて、

「常日頃から兄様を兄様とも思はず、粗末にばかり扱やつたが

今夜といふ今夜は思ひ知つたであらう、若し兄様がなかつたが

最後、御事は云ふまでもなく、母が身は何のやうにならうと思や
 る其れに、御事と妾の名は爪の垢はとも出さず、立派に其場をさ
 ばいて下された兄様の親切空に思うては濟みませぬぞ」
 今更らのやうに我子を叱りぬ、叱られてお小枝はいよ、顔を赤
 めながら、怨めしげに兵庫の方を横目に見やりて母に向ひ、
 「したか母様、父上は、モウお機嫌が直りましたか」
 氣遣ふ我子をお縫は昵と見詰めて嘆息し、
 「さあ其れが喃」
 彼は更に兵庫が方に向ひて眉に入の字畫きながら愈々聲低く、
 「なんの事はない茶碗は偽物、盗賊の思ひをよけるため正眞の
 時雨の茶碗はチャンと御殿の寶藏に預けてあるとやら、其れで
 一つの心配は消えたやうなもの、本に痴癡の強い人にも困つ
 たもの、己れが言語同斷の過失をなしながら、親を親とも思はず

人を言葉の毘にかけて賢者振つたる諫言立て、近頃以て不埒と
 やいはん不孝とやいはむ斯る白痴者を子といふも口の汚れ、斬
 るは尙更ら刀の汚れなれを見付け次第眞ッ二つにしてくれう
 と其れはくきつい御腹立で、何というて宥めても狂ひ獅子の
 荒れたやうに少しも本に兵庫其方には重々濟まぬこと、今宵に
 も明日にも、父上と兵庫が顔を合さうものなら又一騒動」
 いひつゝ、お縫は顔を皺め、叙もて前髪の邊を邪慥に掻きながら、
 「其處でノウ兵庫、これは妾だけの考へではあるが、念のため其
 方に相談するのみなれば悪う取つて貰うてはなりませぬが、豫
 て其方は武術修業かたゝ、諸國を旅して見たいとの志願より
 折がなうて其事は今日まで延々になつてゐたれど、寧ろ此機會
 一年か半歳旅へ出て見やつては何うぢやぞへ、さすれば其内に
 は父上のお怒りも解けうし、第一この場の終局もつきよいとい

ふもの元々妾等母子から起つた事なれば母はこの命にかへて
必と悪うは計らはぬほどに」

かく云出したながらも、お縫は宛がら腫物に觸るが如く、恐るゝ
兵庫の顔を見やりて返答甚座と手に汗握る風情

「旅へ武術修業に」

兵庫はテロりと織母の顔を見上げぬ武術修業は彼が日頃の志
願未だ見ぬ諸國の山河を披沙して名ある豪傑と交り至る處の
地理人情を明め置きて事變あらん時の役に立てんとは絶えず
希うて止まざりし處されど此事一概に刎つけられて許しを得
ざりしに、今織母が口より斯く云ひ出せしは所謂渡りに船の
願つたり叶つたり、とはいへ我子の過失を我に塗付け其れは
當座の苦し紛れ他に策なきためなりとするも其事よりしての
父が怒りを利用して我に家出を勸むる織母が心南無三知らす

く深いところへ陥められたるが、

兵庫は忽ち斯く思ひ至りたれど、本來小事に頓着せぬ豪傑肌の
兵庫、隙く間に思ひ直して、何の業たどひ織母に如何なる巧あれ
ばとて高が女の何程の事か仕出かさむよし仕出かしたりとす
るも我を此家より追うてお小枝に家督を譲るが最後の希望堂
々たる大丈夫の我や兵庫、千石に足らぬ小知行に戀々として何
になる、天は高し地は廣し男兒至る處日の光と米の飯はつきも
のいで、此機をはずさず大腹こゝに翼を伸して九天に昇ら
む些々たる小事何ぞ論ずるに足らん、
彼は莞爾として織母を見やりながら、

「母者、开は誠でござるか、某を旅サ出いて下さらうといふ事」

「ホ、何で嘘を云ひませう、此場の大事ぢやに」

お縫は餘りに手易く相手の我が思ふ壺に落ちしに肝をつぶし

てその限りなき愛嬌ある眼もて瞬きもせず見詰むるのみ、
「されば母者兵庫お言葉に甘へまいて旅サ出ますので、父者御
前の義は然るべく斯る折にござれば父者にお別辞も申しませ
ねば」

兵庫は今にも出立せんばかり、お小枝は只呆れて母と義兄を珍
らしげにデロく、

「其方が何事も爾う開けて出てくりやれば妾も事が仕やうと
さんす為さぬ仲ではあれど夢にも」

お縫は押へるやうに聲に力を入れて、

「露さらく其方を追立てうなといふ悪い心ではござんせぬ、
あの様に一酌な父上、所詮只では治まらぬなれば、此處は暫らく
其方が息を抜いて旅へ行きやつたなら親ぢやもの子ぢやもの、
雨につけ風につけ父上は其方の身を案じて今頃は何處の何國

に何うしてゐるであらうと、さあ其處が此方のつけめ、透さず正
面から切入つて晴れての歸參は最も易いこと」

滑かなる彼が舌は手鞠の如くコロコロと轉びて、帯の間を探り
て取出せし用意の一包、

「これは少いなれども小判で百兩當座の路金にして」
いひつゝ、差出すを兵庫は受取りて押戴き、

「さらば是は難有く拜領します」

「其れから喃兵庫や、たとひ何處の何國からでも、月に一度は必
ず便りを怠るまいぞや、また路銀が切れたれば何日何時でも別
飛脚立て、送つて進せうはどに、斯る事に要らざる遠慮して難
義しやんなや」

「はッ、いろくお心添、々々心得ました」

「土地かはれば水も異り氣候も違はうはどに、充分身を大事に

して病氣しやんなやまた其方はきつい酒好き旅へ出ては何よ
りも身が大事大酒して身をいたぬやうにしや」
彼は懐紙とり出して鼻打拭みながら顔を襟に入れて悄然と差
俯けるお小枝を見返り、

「本にこの阿呆がいらざる事仕出かしたばかりに可哀や兵庫
に此やうな苦勞をさせねばならぬ」

さめくと打泣く涙は嘘か實かざる事には一切頓着なき此方
の兵庫

「では母者善は急げと申しますで、某今から用意して夜の明け
ぬ中に出立しまする」

お縫は半窓より首さし出して空打眺めながら、

「ほんに大分更けた様ぢや、どれどれ、妾が手傳うて遣りませう、
これ小枝何をモウくしてゐるぞへ、早う針箱持つて来て兄様

の笠の紐でもクケたがよ」

其七 有年の驛

頭には菅の小笠脚には白き脚絆野袴の裾短に兩刀横へ振分の
荷物を肩に掛けたる身輕の扮装東雲の城門開くを待つて住慣
れし我家を跡に漂然と立出でし小栗兵庫固より目的なき旅な
れば差して行く先も定らねど聞及ぶ江戸は今將軍膝元の繁昌
諸國に冠たりとやら先づ東海道を東に箱根八里の嶮を越えん
ど流石になれぬ振分の荷物蒼蠅しと屢々擔ぎかへながら城下
の町は人目に立たぬやう笠傾けて急足に東に向ひぬ、
心のみは勇み立てど元來名家の嫡々として大事大切に育てら

れし兵庫生れて廿一年が今日が日までも城下の町を離れて遠く出でしことさへなき身の遠に親に離れ朋友に別れなれし故郷を後に旅路遙けく向ふ身は何とやら心細き氣もしられ見渡す野邊の麥青く菜の花黄に雲雀は高く低く行方をかすめて大空蒼く春風そよ／＼と何處よりともなく得ならぬ花の香送りて、あるは白く或は黄なる蝶の片々として舞ふも風情あり蓬蒲公蓮花草其處にも此處にも咲亂れて若草もゆるが如く一面の錦を敷詰めたらんやうに春の野の眺め誠に氣もゆくばかりなれを兵庫さらにも目にもとめず只管に道を急げどなれぬ足元草鞋にくはれてはかどらず藤井片上三つ石もうはの空に打過ぎ夕陽西に落ちて群鴉聲いと哀れに一叢茂き彼方の森に時を求め所謂の逢ふ魔が時とて行きかふ人の顔さへ見え分かぬ頃やう／＼有年の驛に辿りつきてとある旅籠屋に宿りぬ

窓の障子に臍ろの月影映じて春の夜いたく更けたれを初旅の兵庫さすがに過越方また行末のことなぞ思ひて徒らに枕の音のみさしらしぬ

「あゝ是非もない最早や我らが武士道もすたつたこの上は何うするべい、主も覺悟さめら」

打沈んだる根太き聲の襖一重の隣室より聞えぬ兵庫は寐られぬまゝに聴耳立つれば此度は若き人の聲らしく

「覺悟とはえ」

「さればぢや涙々の身とはいへ荷くも兩刀帶した我等ぢや正かに此身この儘逃げられもすまいさりとて明日に迫つた手詰の十兩其れが出来ぬが最後又候ふ此家な亭主の辱め受けら其れも無念ぢやこの上はハテ何うすべい身共は此處で見事腹一

文字立派に武士を捨てぬ申譯けすべし、主は密と此處ヲ抜け出
いて好き主取りしやれ」

「御分がさる決心なりや某も武士某腹切りますで御分は此處
を」

「黙れ隼人瘦ても枯れても兩刀帶する武士ぞ、義弟の主に腹切
らせておめく、逃げられうと思ふか」

「左仰せらるれば某とても同じこと、義兄の御分に腹切らせて
身一つ全うせられうと思さるか」

「エ、論は無益ぢや、何というても身共が腹サ、武士の一分
相立たぬ」

「いや御分に切らせては某の一分が」

「やあ奇怪ぞ隼人主が一分立てうために身共に一分棄てさせ
うといふか」

「さらば御分は御自身の武士道立てたいために某の武士を捨
てさせ給ふや」

「エ、小賢しい何というても身共が」

「いや是が非でも某が」

争ふ聲は漸次に高くなりて、果は双方掴み合はんばかり、
熱々此方より聞きぬたる兵庫事の趣意はしらねと互ひに武士
道を立てんと争ふさまに、元來俠骨衆にすぐれたる兵庫何條空
耳走らしうべきガハと夜着勿退けて突立ち上り、素早く袴を穿
ち一刀を腰にナツ込み、突然隔ての袂に手をかけて、
「御客人慮外とされど御死なれ」

其八 小判二十兩

聲もろとも襖サラリと引開けてぬッど入りたる兵庫が姿に彼方の二人は肝をつぶしてさッど左右へ別れ、

「御分は」

「甚麼御用ばし御座らつしやる」

四つの眼は等しく身の丈高く神々しく打揚りたる兵庫が身に集りぬ、

「いや御無禮は平に某こと些と仔細御坐つて姓名は名乗り申さぬがゆめ胡散の者で御坐らぬ旅の武士今次にて承はれば御分等御兩所何うやら何事か御迷惑のこと御坐つて互ひに武士

俠 男 兒

俠

男

兒

道を立てんと争はるゝ様子か互ひに武士は斯うありたいもの、と思はず此處を開けまいた是は甚だ禮なき言葉には御坐れど、武士は相見同然及ばずながら御分らの談合相手ともなりまいてと斯くは推參致いたわけ」

いひつゝ、彼方の人品如何と見れば、一人は身の丈七尺に近きばかりの大男面色は鐵の如く顔に五分ばかりのびたる髯むしや、として、ギョロリと光る眼のおそろしげなる三十三の武士一人は年頃十七八色白にしてスラリとしたる若衆振り柳の糸に花咲かせたらんやうなる美少年なり、されど何れも古びたる上にところゝ破れたる衣着て、年來の浪々に尾羽打枯らせし風情衰れなり兵庫さてはと思ふ折しも大男は双手を支へて慇懃に、

「こは初に御意得まする襖一重の彼方に御分のあられうとは

知りませいで、よしない事をか耳サ入れまいた、いやモウ面目も

御坐りませぬ某ことは長州萩の

姓名を名乗らんとするを兵庫は手を上げて押止め、

「いや待たれい某も姓名の義は名乗りませぬで、御分も」

「なる程仰せにはござれと某ことは長州萩の出生出水伊惣太

と申するもの、また是れなるは同國同郷早見隼人と申すもの、聊

か衆道の事より國にも居りかね先年兩人國を出奔致いて諸所

を浪々し、今は御覽する通り尾羽打枯らしまいて」

彼は慨然として太息したり、隼人と呼ばれし若衆も白き手を支

へて、

「元來の不束者か目かけられませい」

恥かしげに燈火の蔭にかくれて禮をなしぬ、

「いや爾う六ヶ敷うしられては恐入りますさて互ひに武士道

を争はるゝは如何なる趣意か、其れ承知致いて某か力になりた
うござる」

大男は眼を瞬たきながら

「將もない事のお耳に入りて、我ら面目もござらぬ、今は何をか

包みませう、眞は某等二人後の月の初旬より當家へ宿かりまい

た、勿論最初は只一夜の宿りと思ひまいたに、某不圖持病の瘧を

患ひまいて枕上らず、二日はよい三日はよいが、トウ、五十日

近くなりまいた」

「む、成程」

「この間の醫藥の料やら、二人が宿料其他何やら斯やらで、當家

十兩近くの負債になりまいた、ところが四五日前より宿の主人

が厳しい催促しかし、御覽うする通りの我等十兩は愚か、壹兩も

手許にはさればとて、開を算段せう工風も御座らずと申して借

りたるものを遣はさぬといふことも尙更ら参らず漸く明日の朝まで猶豫は乞ひましたもの、何として何として其金が」
彼は男泣に泣きたき風情、

五十

「斯る急場となるも兎角は某めの運の盡弓矢八幡にも見放されたるならむ此上は宿の主人への申譯に尋常に割腹いたいて相果て是れなる隼人のみ此場を落さうと致いたに弁を彼是と争ひますのでつい聲高になりまして……」
默然として聞きおたる兵庫は思はず兩眼よりホロ／＼と涙を滾して、

「あ、惜も見事な御兩所互ひに死を争うて武士道を立てうとさる、某思はず落涙しまいた」
いひつゝ、兵庫は聲ひそめて、

「其處でノッ御兩所斯る事容易に打出ては御無禮ではござ

れど、如何でござる某聊か路金の持合せでござれば、御分等に進せまするで、其争ひは某にお任せ下さるまいか」

「やッ何と仰せられまする」

「我々に路金の中より、この急場を助けてやらうと……」

「いや助けるなぞ、其様なことではござらぬ、金は天下の廻りものと聞きます、只某が寸志ばかりに」

兵庫は早や胸巻取出して中より掴み出す、小判二十兩密と大男の前に差出すを見て大男の眼はギロリと光りぬ、

「本の寸志」

兵庫は又持病の俠氣を出せしなり、彼方の二人はハッと額を疊に摺付けて聲ふるはしぬ、

「あ、ナニ何事も申しませぬ」

一番鶏の聲は威勢よく背戸の方よりコッケコッコ

其九 戀の敵

俠 男 兒

梢の花は早や散りたれど春の野の景色美しく日はうらゝかに
空には一點の雲だにもなし

「こりや許せよ茶をくれい」

何れもおぼろ富士と名づけたる編笠に面を包みて旅の武士三
人山崎の渡船を打渡りて路邊のよしず茶屋が床几に腰打掛け

ぬ
中にも一際大兵の武士は今來し方を振り返りて

「見られいアレが音に名高い洞が峠大和の筒井が二股かけた
日和見の場所とさつた」

「ほう好い地の理で御坐るの」

「されば是より山崎の戦場を望めば羽柴明智兩軍の勝敗は手
に取るやうで」

「なる程して此方は」

「おれは入幡此方は淀見られし此方の山が兩軍必死の戦ひを
致いた天王山でござる」

「む、無花々しい戦闘でござつゝらう」

一人りの武士は思はず骨鳴つて肉動く風情頻りに天王山を見
上げて感に入りぬ

残る一人の若き武士は只黙して彼方此方と打見やるのみ

「いやモウ旦那様方のお口には合はぬ出がらしの澁茶でござ
りますわへへへへ」

黒く垢づきたる茶碗三個を割けたる盆に打載せ乱杭の齒をむ

俠 男 兒

き出してもてなす主人の婆を大兵の武士は編笠越にしろりと見やりて、

「こりや婆此邊は大い賑はうやうぢやが何事ぢや祭禮かの」問はれて婆は可笑しくもなきに骨路はに筋高く彼打寄りたる手を口元にあてゝからゝと打笑ひ、

「これが貴方様豪いことでござんすぞへ今日から明日明日から明後日へかけてはドイライお祝ぢやまつてなア」

「むゝ祝ひといふか何の祝ひぢや豊年祝なりや秋の收穫すんでからぢやが」

婆は早や得意になりて、

「見れば貴方様方は遠い御國の御仁である、其れで御存じもあるまいが此邊一圓の御領主様の御家督御相續が明日でござんす故皆が祝うて居りますのぢや、鎮守には相撲があるやら綾つ

り人形が出来るやら昨夜からそれはく大い賑ひ、晩になつたら村の若い衆が好い玄妻見付けて追廻すのでまた一騒動でござんすわいなあ、ホゝはゝホゝはゝ、」

大兵の武士は打笑ひしと見えて編笠にゆらくと波うたせ、

「はゝはゝ、其りや芽出度のウ」

「芽出度のいなのて、人はいざ知らず妾は少しも芽出度う思ひませぬ」

「むゝ何故ぢや」

「ホゝ高うは云はれませぬが、此所の御領主様は山崎四郎太夫常義様と仰せられてソレ御覽なされませあの淀川に臨んだ所に御城のやうな屋敷が御座んせう」

此方の三人は等しく婆が指さす方を見やりぬ、大兵の武士は領きて、

「ひ、く、あれかノ」

「あの御屋敷にござらつしやるのでござんす本に好い御仁で
妾は大好どころが旦那様此處の御領主様の御本家は是からッ
ツと先の高槻といふ處で山名越中守様と仰しやる御方でござ
んす」

「はウ汝なかく、詳しいノ」

婆はいよく得意になりて、

「詳しいの詳しいないのえ、妾の亭主は若い頃御領主様のお足
輕も勤めましたものでござんす故何から何まで知り抜いて居
ります」

彼はその薄襪き口より蟹の如く泡吹きながら雀の囀るやうに
ベチャクチャ／＼興にのりて喋りぬ、

「貴方様その越中守様の御家督の御式が明日でござんすので、

此處らの阿呆めが彼のやうに騒ぐのでござんす」

「なる程」

「貴方様其處にその面白い段取がござんすので、越中守様と仰
しやる御仁は此處の御領主山崎様の御從兄で、矢張り山崎様と
同じやうに此處の先殿様にアノ御屋敷で育てられなされたの
でござんす、去年は此處の殿様に二つの兄様ぢやが至てお氣の
荒々しい殺生と御酒の好きな御仁で、春と秋冬は野狩山狩夏は淀
川で漁夫のやうに魚取りばかり、明日はいよく高槻の御本家
へ乗込んで御家督の御式があるといふ今日ぢやに、まわ何うで
ござんせう、今朝から相も異らず山で小鳥の御獵でござんす」
隣家の疝氣を己が頭痛に疾むとは眞にこの婆が事を云ふなら
んと此方の三人は笑ひを忍んで聴きゐるなり、

「ところが貴方様呵しいではござんせぬか、御本家のお姫様入

重姫様と仰しやるは、小野の小町か照天姫、それは、美しい御
仁でござんす、其れ故、此處の御領主様が自分には御分家で御家老
格でゐながら強い御執心ならば、此家付のお姫様の聲がねにな
つて、御本家の殿様にならうとの思召し、其れが外れて現在御
從兄の殺生好様が御家督と斯う極つたばかりか、遠からず八重
姫様と御婚禮、白髮の八千代の末までもといふホ、ハ、ハ、羨
しい次第でござんせう、其れ故、この殿様はさつうお氣を揉ん
でござるとやら、若し殺生好様さへなければ、八重姫様の聲君は
此處の殿様より他にないのでござんす、詰りお二人様は戀の敵
下世話で云は、鞘當とやらでござんすに、此邊の阿呆共、そのや
うな事も知らず、此處の殿様が、お心で泣いてござるも知らず
に、芽出度い、く、と、まわアノ騒ぎ方は、何でござんす、妾は口惜し
うて、く、

乱抗の齒を噛んで屹と彼方を睨む、婆のさま宛、宛がら手に持つ櫛
を引摺はれたる猿の如し。
此方の三人は、鳥目そばくを床几の上に投出して、ッど起上り
ぬ、大兵の武士は先に立つて、
「婆邪魔して濟まぬ」
いひつゝ、二人に向ひて
「何事も後の日の談の種音に、名高き山崎の戰場、あの天王山サ
登つて見まいか、」
「む、面白かんべい、當時の英雄が軍の作戦もアノ絶頂サ登れ
ば、大概は分るべし」
談合は忽ちど、のひて、三つの編笠は雁行をなして、雲雀飛ぶ姿
畑を横切り、馳て姿は彼方の鍔陰にかくれぬ、

其十 天王山

春の山、春の谷、其處にも此處にも新緑もゆるが如く、天はのどかに梢に鳥の囀る聲々、吹く風につれていづこよりともなく床しき香のするは、若葉がくれに尙ほ残んの色ちらほら見ゆるしるし見上ぐれば、岩の狭間に躑躅の花も匂ふなり、見下せば苔を洗ふ清水の音も聞ゆなり、彼は織女が織なす錦の如く、是は天女が奏づる音楽に似たり、おはれ人界遠き天上の樂園とは實に斯る處をやいふならむ。

若葉茂りて一道の徑路を覆ひたる九曲折を辿り來る編笠武士三人先なるは中なる大兵の武士を見返りて、

「さて、困つたこと山崎天王山はさしたる高山にもあらぬと聞くに、行けども行けども麓へは出ず、見られい山又山谷又谷、さればちや絶頂を下る時道を誤つて樵夫の入る細道深く、漸次々々に奥深く迷ひ込ひだであらう、されど何程のことかわらうや、應て元來し處サ出やう、正かに此山丹波の奥へも續くま」

後なる小兵の武士は編笠越に空打仰ぎて、

「まかし何うやら最う日も傾いた様子」

まことに彼が言葉の如く、四方を顧みれば日色漸く晚れて、山の影稍々沈み春の山ながら吹く風冷く、落日烟をおひて碧の霧を生じぬ、

大兵の武士はカラ／＼と打笑ひて、

「何うあるべし、日が暮れば山で一夜明さうまで、先づゆる／＼此處らで休むべし」

彼は途ある木の根に腰を下して悠々たり、

「ほう什麼も其通りぢや」

先なる武士も同じく木の切株に腰打掛すれば、後なる小兵男も若草を褥に尻打下し、

「其處でぢやがノウ」

大兵の男は編笠掻退けて物凄げなる髯面突出しぬ、

「我ら些と御分にお頼みのごさるが」

小兵の武士も手早く笠どりのけてスワ事ありといひたげに、色白き頬に稍々紅を潮し、黒目脇の兩眼を睜りて先なる武士を見詰りつ、

「ほう突然の頼みと云はるゝは」

これも同じく笠どり退けて面を出ずを見れば、一朝の俠氣に家を棄て、行術定めぬ旅にさまよふ小栗兵庫なり、他は物とし風

俗にも一目に其れと知らるゝ、有年の旅籠屋にて兵庫に恩を受けたる長州の浪人出水伊惣太と其義弟早見隼人なり、伊惣太は兩眼ギョロリと光らせて、

「幸ひ暮れかゝる天王山の奥深く時に宿かる鳥穴這ひ出づる蛇その他には樵夫の影も見えねば聞くものもあるまい頼みといふは他でもない御分が懐中の路銀、まった其大小残らず貸して貰ひたう」

「何といふ」

兵庫は屹と容を改めて片手もてアツリと刀の鯉口切りつゝ、

「事と品によらば高の知れた路銀、残らず貸さぬでもないなれども武士の命とする大小まで貸せとは」

此方の早見隼人も大膽に、

「小栗氏最早や彼是いはれう場所でない、我らは斯う見えても

音に聞えた旅鳥胡乎と我らが計畧にのられたが御分の不詳
伊惣太はニヤ／＼打笑ひながら

「は、は、未だ漸ら巢を出たばかり羽翼そろはぬ小雀の呀の
青い辯して大膽なる武者修業呼はり熊鷹眼で疾く睨んだ我ら
ぢやなる程有年の驛で恩はあらうけれども、あれは我らが巧ん
だ狂言お主の阿呆を見抜いてした芝居、その時チラリと見れば
胴巻の財布には尙ほ残る七八十兩、其れが欲しさに道進して此
處まで来た、この山サ連れて来て斯う奥深く迷はせたも豫て巧
んだ細工ぢや」

「早や通れぬ場所尋常に其胴巻と大小我らに渡いて命一つ拾
はれい」

相手は只一人と侮つて左右交も詰寄りぬ、
「黙れ下郎」

兵庫は一喝してツと起上り身を居合腰に構へながら、

「君子は欺くに道を以てす、互ひに武士道を立てんと死を争ふ
は天晴れ武士の總鑑、古今に絶した義者と思つて當座の難義を
救ひやつたに、一々我を陥れうため巧うだ、是とは汝卑怯なる盜
賊め、腕に覺えある小栗兵庫ぞ、この胴巻と大小見事取れるなら
取つて見い」

「やあ、睨いたナ、二才劍道は無敵流、力量は十人力の男を知らぬ
か、さらば其舌の根引抜いてくれう」

「兄者論は無益ぢや」
「お、合點」

兩人大刀ズラリと抜放し、刃鳴を立て、前後より切込みぬ、され
ど此方の兵庫年こそ若けれ、劍道は一家中に聞えし達人、膽は幼
き頃より飽まで振りし不敵者、透さず身を交して、一間餘り飛退

き同じく一刀拔翳して身を構へながら、
 「眠れる獅子の背を引くが如き白痴め、さあ来い」
 彼方の二人は初太刀を打損じて無念とばかり物をも云はず再び左右より切込んだり、漸次に暮れゆく春の山の谷は烟りて木の下間は物凄く、三條の刀は稻妻のきらめくに似て互ひの切聲木霊に響き渡りぬ、
 敵は餘程の手練ありと見えて思ひしよりも手硬く、流石の兵庫大汗になりて必死と戦ひ、曳と打込む伊惣太が太刀を受止め、開くと共に、作人が肩先深くズンと切下げ、血煙さつと立つよと見る折しも、兵庫思はず足下の木の根に躓き、緑の若草踏つぶして底知れぬ谷へコロコロと轉び落ちたり、

其十一 瓜二つ

夢ともなく現ともなき小栗兵庫が耳元に微に聞ゆる人の聲、
 「やあ不思議ぢや、是見い頭の先から足の爪先まで似たとは思か瓜二つとは此事」
 「む、年頃といひ髪髪の毛の縮れた處までが殿に其まゝ」
 「自牒何處の者か、手に抜刀を握つてゐるは何者かと戦うたぢや」
 「身内に傷はないか」
 「少しもない、さては這の山の上で戦うて落ちたであらう」
 「兎に角も呼び活けて見よ」

「好的」

大聲もて頻りに呼ぶ聲に兵庫不圖我に飯りて眼を開きぬ見れば日は早や全く暮れて四邊は暗く左右の山は屏風を立てしが如く己が身を横へたるは若草もゆる柔かなる地上にて程近く一道の露流ながるゝと見えてチヨロ／＼と清き音あり、手に／＼松火を持つたる狩装束の武士二人その火光に照して訝しげに我を見やる風情さては木の根に踏きて谷へ落ちたりとまでは覺えしが其まゝ此處に氣絶しぬたるならんと兵庫は冷き夜風に身をふるはしながら慌てゝ起上りぬ、
「やア背丈までも主君に其まゝ」
叫びたる一人の武士は年頃廿五六色淺黒く眼はしく瘦肉にしてスラリと高き身の丈頭には裏金一文字の味笠を被きたり、
「おゝ氣がついたか」

斯くいひし他の武士も同じ年頃は稍々前の武士より肥えて背は低けれと色白にして鼻高く何とやら勇氣全身に充ちたるやう見ゆる壯夫なり、
兵庫は再び大地に跪きて、
「見上げまする處いづれも御座々方某を呼び活けられたは御分方で」

背高き武士は領きて、
「いかにも拙者等で御座る」
肥たる方も、

「某ら計らず此處を通りまいたに其許が抜刀片手に倒れてをられたで呼び活けまいた何處もお怪我は御座らぬか」
兵庫は恭しく禮をなして、

「はッお蔭を持ちまいて痛み場所は少しも御分方の御通行な

くば、某め此やうに氣もつかず如何に成り行くやらむ、お禮は言葉にも盡されませぬ」

斯く謝しながらも兵庫は我を何者にか似たり〜といふ訝しさに額越しに二人を見上げて不審顔なり、瘦たる方は慇懃に、

「いや左程禮云はるゝ程でもござらぬ、さあ手上げられい」
「して其許は何れの御仁にや」

肥たる方は問ひぬ、兵庫は莞爾として、

「某は備前岡山の者小栗兵庫と申す小身者聊か志願あつて諸國を武者修業致す者でござる、して御分方は」

「いや是は御無禮とござつた拙者等より名乗りませいで先づ其許のか名聞きまいたは平に御容捨われ拙者等は此邊一圓の領主高槻に居城を持たるゝ山名越中守定茂侯の近從拙者は松原

群平、これなるは古曾部準太と申すもの」

「以後お見知り置かれ」

準太もその肥たる五体をかゝりめて式盛したり、未だ宵ながら谷深き邊りの風は冷く、二人が手にする松火は次第に燃えて残り少になりぬ、

「いかに小栗氏何も御縁でござらうで、今宵は拙者らお宿申さう」

群平が言葉に準太も頷き、

「む、其れが可い、見れば天晴れ骨柄の兵庫殿武者修業を思ひ立たれた次第も聞きたい、それに」

準太は兵庫の顔を覗きませず、昵と見詰めて、

「不思議なるは其許の容貌我等が主君定茂侯に寸分異はぬ一事でござる他人の空似とはいへ、殿と其許を并べて見ても何方

「何方やら喃群平」
群平も頷きて、

「これを不思議といはねば世の中に不思議はない兎も角も兵庫殿とやら其許を殿にも紹介しませうで殿は至つてお氣輕な御仁でござれば拙者等と一所に來られい」

兵庫は始て似たりくといふ其意を解み得て成程不思議親子でもなく兄弟でもなき無縁の他人が生寫とは彼等の訝り怪しむも理なりと思ひながら、

「さらばお言葉に甘へまして今宵はお世話になりませうべし」
松火に足元を照して群平は先に兵庫は中に隼太は後に三人谷をつたうて行く先は何處夜の山は眠れるが如く空には梨子地のやうにきらめく星幾萬點、

其十二 明國の紅酒

國守領主なぞいへるものが民の膏血を絞つて飽まで己が腹を肥す當時の習ひさても斯る山中に何たる物好ぞと思はるゝばかりの立派なる建造物ありさして廣からねど書院もあれば遠侍めきたるもあり厩もあれば厨もあり前には谷川の清水流れて躑躅の花の乱れ咲後ろは屏風を立てしが如き山高うして一面の小松茂り天地物静にして風清く春夏秋冬の眺めえもいはれぬは誰わらうこの領主山崎四郎太夫が從兄の定茂明日は本家山名家へ入家して美人の聞えある八重姫君の聲となり山名越中守と名乗るべき活潑にして剛毅に酒好にして殺生好

なる若殿が狩場の小家冬は猪を追出し、春と秋には小鳥を捕へんとて此處に休足せらるゝ御小家なり、
 春の夜更けて山は静に、折々梢を吹く風さわくと鳴りて、岩洗ふ露流の音冴えたり、
 十畳の書院の中、一間の床を後ろに、狩装束のまゝ、褥の上に豊に座したるは、若殿定茂侯左には、松原群平右には、古曾部隼太少し下つて、眼涼しく額突出でたる年頃十九ばかりの腰元らしき女の侍し居り、座には杯盤どころ狭きまで並べられ、殿と相對し遙か下つて座したるは、小栗兵庫なり、
 銀燭の光は座を照して、白晝の如く二人の近侍は今更のやうに似たりやくと殿と兵庫を訝しげに見比べぬ、
 「小栗兵庫とやら、遠慮は無用ぞ、飽まで過すがよい、こりや群平、予にも酌せし」

ぬッと大杯を突出し玉ふ殿群平は恐るゝ、
 「まかし夜も大分更けまいたで、今宵は是にて明日の大事もござれば」
 聞きも果てず殿は聲荒らかに、
 「黙れ夜が更けうが明日大事の用があらうが、一夜を徹して大酒したために前後不覺になる予でないぞ、要らざる遠慮ぢや、酌げく、ノウ兵庫爾うでないか」
 兵庫は此場の返答に困りて、
 「はッ、測らぬ事より斯く親しく御目賜りますのみか、御酒下し置かれまいて、兵庫め太く酌酩の致いまいた」
 「なんぢや酌酩した弱い音を出すものでないぞ、荷くも予の偽物どもあらう其許が而も武者修業に諸國を遍歴せうは、その其許にも似ぬ」

殿は高く笑ひて五合も入らんばかりの大杯を一口に干し玉ひぬ

「何うちや兵庫見事であらう、予は斯くても酔はぬわ、わ、能い心地ちや明日は本家へまゐつて家督相續の儀式をせうといふ今宵予と寸分違はぬ偽物が顯れるといふは抑も何の兆ぞのう兵庫」

「はッ恐入りまする」

「いや何も恐入ることはない、は、は、一樹の陰に宿るも多少の縁といふでないか、況て此の狩場で兄弟よりも猶似た其許と予が出會するも一つの不思議ぢや、急がぬ旅とあらばゆるく予が家に逗留するが可え、やがて夏にもならばアノ淀川に網ひいて魚族の根を絶やしてやらうわ」

を驚かさんと兵庫を引見せしめしなり、されば一目兵庫を見たる殿は鏡に寫れる己が姿と寸分違はぬ兵庫がさまを異しみ兵庫は又殿を見て、我は世にいふ離魂病とやらに罹りしにはあらずやと疑ふなり、

かゝる中にも活潑にして磊落なる殿忽ち兵庫が什麼も凛々しく快調なる氣象の氣に入り、一見宛がら舊知の如く近従の群平隼太同様些の隔心もなく斯くは打解け給ふなり、殿は興にのりて所謂長鯨の百川を吸ふの勢群平隼太が諫むるをも聞き給はず、更に幾杯をか重ね給ひて次第に言葉の呂律も怪しく酔は据りて恐ろしげなる面持とはなり給ひぬ、

「お、本に妾としたことがコロリと忘れて居りました」

今まで一語をも出さず座に侍しゐたる腰元女はハタとばかりに軽く己が膝を叩き、ッと起上りて違ひ棚の片隅より取出せし

一個の瓢

七十八

「御前様へ申上げます、これは山崎の殿様より御前様への御進物、大明國の紅酒と申すものとやら」

殿は据りし陣もて昵と女を見詰め給ひ、

「なんといふ紅酒ぢや、ひ、明國の酒ぢやな、面白い、御事は四郎太夫が氣に入りの女とやら、其女に瓢の酒を献じさすは、は、四郎太夫も粹な男ぢや、どれ、酌げい」

殿がまた差出し給ふ大杯に、紅色の酒はナミ、と酌がれぬ、開を一口味ひ給ふ、其時此時

「暫らく殿ッ」

隼太が聲は雷の轟くが如く響き渡り續いて、

「胡平と其酒聞し召してはッ」

叫ぶ群平、同時に隼太が片手の扇子は躍つて、殿が御手の杯はハ

タと叩き落され、血の如き色したる異しき酒は座に流れぬ、これはと驚く女を群平は透さず取つて押へて、

「汝ッ」

手早く刀の下緒にて縛めぬ、

奇怪なる此場の體に、兵庫は呆れて爲す處を知らず、殿は何時の程にや倒れ給うて、軒聲雷の如し、

其十三 苦肉の計略

血刀提げて突立つたる古曾部隼太、身首どころを異にしたる女の死骸を睨んで、大息吻く、松原群平、互ひに顔見合せて嘆息しながら、

七十九

「隼太」
「ム、群平」

「あゝ何事も無益となつたりぢやが隼太其處怒りに任いて此奴を斬つてさて跡の始末を何とする」

群平が言葉に隼太は其肥太りたる面上朱を漲ぎながら、

「何うも斯うも殿に毒酒を進めた太い女め先づ軍陣の血祭り
に斯うして我等兩人山崎の館サ切入り四郎太夫の素ッ首引抜
いてくれうまで」

「ム、其れも可えが幸ひ殿は只一口飲まれたのみぢやで、お命
には別條ないされば餘りに早まつた事もなるまい」

「玄かし最う程なう夜も明けうに、あの御昏酔の體では所詮其
まゝ高槻サ御入城もなるまい御入城出来ぬとすりや群平豫て
非望を懐く山崎四郎太夫此時こそ、一々殿の御不行跡を數へ

て御家督の義は其まゝ沙汰止み續いて彼奴家督相續八重姫様
と婚禮といふ段取になるは定ぢや斯うせうために殿に小鳥狩
を勤め毒酒を献じたに相違ない今は何事も空ぢや兎角は云は
す四郎太夫に近寄つて刺ちがへて死ぬまで」

忠義に凝つたる古曾部隼太無念の牙を嚙鳴しながら片手の血
刀リウ〜と打振りぬ群平は兩眼を閉ぢて稍々暫し無言なり
しが彼は忽ちニコリとして、

「隼太よい事があるわ先づ其刀納めい」

「む、何事ぢや」

隼太は死骸の衣裳にて刀の血糊を拭ひて鞘に納め朝の山風を
頬に受けながらドカと椽に腰打掛けぬ、

此方の群平は落着き拂つて、

「此上は苦肉の計畧を用ゐるより他に策はない其處でぢや隼

太殿が今日御入城なうては天下の大事棚の牡丹餅は四郎太夫
めに落ちるで、何うでも殿に御入城を願ふことにするぢや
彼は願の髻を撫で、悠々として迫らす、隼太は氣をわせりて、
「殿に御入城を願ふ、死人のやうな泥酔の殿がナ、何として御
入城なるべし」

「さあ其れを成らせる、其處が奇器ぢや、可えか隼太、そら、今殿を
介抱してゐられるアノ殿」

「ナニあの殿」

「并べて置いてさへ見紛ふばかりの小栗兵庫、彼を殿に仕立て
、乗込むべし、」か八かぢや、罷り事露見した曉には透さず四郎
太夫に組付いて刺ちがへるまで」

近頃以て大膽なる群平が計畧に、隼太は呆れて稍々暫し黙せし
が、彼とても今は絶命絶命、この他に手を打つほどの好き智恵も

出ねば元來の不敵者ツンと胸を据ゑて、

「エ、何とせう是非がないわ、やるべし、ッ、其れをやるべし」
いひつゝ、彼は少しく眉を顰めて、

「しかし喃群平、兵庫が其れを承知せうか」

「は、要らざる氣遣ひ、兵庫殿は全身に俠氣充ち、た立派な
武士固より命を的の仕事ながら我等が難義サ見て否とは云は
ぬ、論より證據、身共に任せい、屹と應と云はせて見せうわ」

談合は茲に一決して、兩人は元の座に戻りぬ、今しも死人の如く
に眠れる定茂侯を介抱する兵庫に向ひ、意中の秘計を殘す語り
て、わはれ二人が微衷を憐れむの心露ばかりだもあらば、進んで
殿の偽物となりくれよと頼むなり、

何事にもあれ、一旦人に頼まれては否といひえぬが、兵庫が豫て
の持病なれば、彼は其事業の餘りに演藝めきて我には難からん

とは思へど、エ、儘よ物は方つて碎けよ、遣れる限り遣つて見るも時に取つて興ありと、

「よし、何うでも今日殿御入城なうては御一大事とあらば、某命のあらん限り殿に成り澄しますべし」

断乎として承引きたる言葉に、群平隼太は雀躍して喜びながら

「さあ最う斯う事が極れば大船に乗つた心地ぢや、汝あくまで巧うだ四郎太夫めに一泡吹かいてくれうわ」

と隼太は意氣大に昂りぬ、

「其處でぢや隼太其許と身共は兵庫殿を殿に仕立て高槻サ乗込まう前に、先づ正眞の殿を此まゝ密と此處に隠して置いて御家督相續の儀式終ると同時に、隼太其許は兵庫殿と只二人馬を飛して此處サ戻る、而して今度は本物の殿を夜の中に高槻サ逃れ申す、此間身共は高槻で殿の御寢所を守つて何人も入れぬ是

れは何うぢや」

眞に細き綱をつたうて谷を渡るが如き謀略なり、とはいへ此他に然るべき名案もなければ、

「好的其れに極めた兵は拙速を貴ぶ事が極つたなら少しも疾うやるべし」

性急の隼太は斯く叫びて他を促しぬ、

「む、さらば先づ此女の死骸を隠して、さて殿を人目にかゝらぬ場所へ入れ申して」

「かゝ其れが可え」

隼太は幾度か打領きて、

「逸平々々」

と高く呼ばはりぬ聲に應じて恐るゝ入來りしは隼太が腹心の家來小兵ながらも天晴れ骨格よき若者なり、

「かゝ逸平か、大概の様子是最う知つゝらう、其處でぢや、汝は殿を奥の間にお移し申して、よいか、假令如何なる事あらうとも、汝が命にかへて何人にも見することならぬぞ、心得たか」

逸平は片手もて己が胸を押へながら、
「シカと、此胸サ壘みまいて、逸平め息の根あらん限りは」
勇しき彼が答に隼太はニッコリ、

「むゝ出かいた能うせい頼うだぞ、さて群平時が移る」

「合點ぢや、さらば兵庫殿」

兵庫も遽に戦場に出づる思ひ、我にもわらで武者振ひして、

「むゝ、好的」

其十四 鼎の足

世に奇謀を用ゐて敵を挫くもの多し、孔明の琴楠公の泣男、一々數ふるに暇なけれど、思へば松原群平が計略はと不思議に危険なるはあゝるまじ、たとひ殿と兵庫が瓜を割いたる其れよりも相似たりとはいへ、兵庫は兵庫なり、殿は殿なり、のみならず、兵庫長く殿に接して、一々殿が口癖、手癖を覺えぬるにあらぬば、一時は難なく敵を欺き得たりとするも、應ては兵庫彼自身の手癖、口癖のあらはれざるにもあらず、殊に兵庫は備前語殿は生れしまゝの攝津辯、其れや是れやに思ひ至れば、方に一つも成効は覺束なかるべし、石を抱いて水に入るといはんか、劍を口にして高さよ

り落るといはんか、

さはさりながら群平が頼みとする處は他ならず、兵庫を殿に仕立て、衆人を救くは儘に朝より晩までの只一日なり、夜に入りなば兵庫は準太と共に急行して再び天王山の狩場に戻り、この度は準太正真正銘の殿の御伴して高槻城へ入り、兵庫は其まゝ飄然として東の空へ旅立つにあり、されば前の兵庫が偽物なりしことは神ならでは知るものなく、山崎四郎太夫が陰謀は空しく水の泡と消去りて國家は安泰殿は萬々歳、この間たい哀れなるは小栗兵庫一人なり、彼は己が妾かたちの殿に生寫しなるがために群平等が計略の囮に使はれ、首尾よく事成らば其身其儘國境を去りて再び向ふ旅の空事もし破るれば敵のために屠られて朝の露と消えねばならず、勝つも負くも成るも成らぬも兵庫のためには些も利する處なく、云はゞ只

他個の爲に危き綱をつたひて彼方の山へ渡らんとはするなり、されど兵庫にして若し不敵の悪意あらんか、首尾よく事成就すれば我は其まゝに飽まで殿と成り澄し、郡平を殺し、準太を斃し、狩場の殿を人しれず亡は、高槻城の主人となつて美人の聞え、高き八重姫君を妻となさん、最と容易なり、知らずや元龜天正の風尙吹きのこりて慶長元和の血の雨未だ乾かぬ、今日この頃假にも身の立身出世を望み、披山蓋世の偉業を建んと願ふは、このものならば、斯ばかりの事は手に唾して爲すべし、智者を以て聞えし、松原群平素より是はどの道理知らぬには、わらねど、如何せん事は急なり、時は迫れり、夜の旅路に行惱みたる折は宿るに家を撰ばず、わくまで飢ゑたるものは、食ふに食をえらばぬ、習ひ幼き頃より殿と共に育ち、名は君臣なれど、實は兄弟よりも親しく、昨日までも今日までも準太もろとも、一日片時殿

九十
が傍離れず三人鼎の脚の一を缺いでは物の用に立たざるが如く、寝るにも起るにも何事にも三人手を携へ來りし群平、さるを其頭とする殿の危難に處しては、手足の群平、隼太深く前後を慮るの暇なく、否假りに微細に思慮をめぐらせばとて、敵の毒蛇は顔を開いて今にも高槻城を一呑みにせんとする刹那一分おくるれば一尺殿の大事なり、此上は一か八かノルかソルか運を天に任して無二無三に風前の燈火、石下の卵にも似たる計略を行はんとはするなり、あはれ彼が忠義一圖の眼には最早や他を見ざる暇もなく、而も壯年血氣に任せて這の危き大博奕をうたんとはするなり、
博奕々々博奕の盆胡座は高槻城轉ばす賽の目は果して丁と出づるか半と出づるか、
「さあ用意がよければ行くべいく」

叫びしは古曾部隼太、黒毛の駿馬に其の肥え太りたる五躰をゆるりとのせて手綱引絞りぬ、
「おゝ殿の御用意は充分ぢやい、いで」
同じくヒラリと栗毛の背に跨りし松原群平見れば凹みたる両眼に昏ならぬ決心の光を放つて見返りぬ、
「先づ爾う急かれな、急いては事を仕損ずる、春の日は長いで、いひつゝ鹿毛なる駒に悠々に打跨つたる兵庫見れば頭には裏金一文字の陣笠、狩装束に身を固めて滋藤の弓を小脇に、鞍壺叩いて莞爾と打笑みたるさま、更に昨日の兵庫ならず、右から見ても左から見ても前後縦横兎の毛も違はぬ定茂侯なり、
「群平、汝先へ行け、隼人續け」
あゝ恐ろしの偽物は聲まで立派に出來揚りぬ、朝の山風は決死の三人が頬を拂つて遙に里の方より雞の鳴く聲聞えつ、

其十五 三騎

侯 男 兒

山崎天王山より高槻の城に至るには淀川を渡らず右に白雲た
なびく神峯山を仰ぎ左の方遠く見ゆるは大和河内の山又山春
は菜の花匂ふ畑ついき竹藪茂れる村いくつかを越えて音に名
高き櫻井の驛夏は青葉茂れる北山の裾をめぐりて神内梶原さ
ては能因法師が圓寂の地はあれかどばかり古曾部の村を斜に
見て芥川より高槻といふが順序なりこの道程三里には近く二
里には遠かり
三頭の駿馬はさつと吹下す天王山の朝風に嘶いて鐵蹄大地を
鳴らし眞先には松原群平僞物の定茂侯を中に殿りは古曾部集

侯 男 兒

大事若し合期せずんば今日夕暮の鐘をもまたで散る身の三人
地獄極樂の分れ路は眼前に迫りながら窮鼠今は猫を恐れぬ群
平準太元來不敵の本性あらはれて逃に大名になりし心地の小
栗兵庫自ら馬のあがきをゆるめて山の裾を騎たせながら
「最う程なう山崎の館から殿を警固の人数の向ふ頭ぢや」
群平は手綱を引絞つて見返りぬ
「む、首尾よう殿を見出さねば可いが」
準太は打沈みたる聲
「元來如才ない逸平ぢやで万々仔細はあるまら」
兵庫は高く笑ひて
「よし仔細があつた上で何うすべし今は只進むの「つぢや」
いひつゝ彼は馬上豊に威儀を正して
「こりや群平汝のやうに萬づに思ひ過ぎては臆病風が吹き渡

らう、天は明かに善人の頭上を照さう、何氣遣うことかは、のう準太

時に臨んで飽まで不敵なる言葉、而も其五音の調子態度容貌寸分殿に違はぬに今更ながら準太は驚きて、

「如何にも正眞の殿ぢや、誰が見ても殿ぢや」

群平も頼母しき心地のして振返りながらニコリと打笑み、

「天晴れ定茂侯、此の様子なりや、誰一人として偽物とは覺るま

す」

「先づ九分までは計略圖に當つたか」

準太も嬉しげに斯くいひぬ、

馬は駿足騎者は達人、朝日まだ昇らず東の空に紅を流せし如き色して、中空にゆくに従ひ黄金色する頃、高槻城の大手の馬場、八丁松原といふに着きたり、

路の左右に並べる松の間を騎たせながら、群平は聲を潜めて、
「さあもウ此處が大手、あれ見られい、あの天守が今日一日の御分の城廓」

兵庫は流石に武者振ひのせられて、

「む、成程一夜漬の殿様貫目があらうか、我ながら聊か懸念ぢや」

「あるともく、天晴れ見事な殿様振り、シカど頼うだぞ」

準太が呷く聲に、兵庫は無言に頷きぬ、

「其處でぢやがノウ、殿の御辨は前に大概は話して置いたが、事に紛れて只一つ忘れたは、殿が第一の御口辨、こりや何を愚圖々々致しをる、これぢや、性急の殿様ぢやで」

更らに呷く群平、兵庫は是も無言に頷くのみ、

城門の開くは卯の上刻、見れば早や一文字に開かれて、今日しも

御登子定茂侯御家督相續の御儀式ある日とて諸役人は何れも禮服の威儀を正して俄に設けられたる大手御門の役所に詰掛

け居れり、此方の三騎は鞭を鳴らして騎入つたり、

「何者ッ」

時もあらうに場所もあらうに、馬上の騎打ち奇怪至極と段々羅の幕引絞つたる役所より響く大音、

群平は馬の頭を立て直して飽まで聲に威嚴を持たせ、

「これは定茂侯に近従の松原群平」

「同じく古曾部準太」

「殿様には本日辰の上刻御入城の筈でござつたが斯くては道中の村々小役人百姓共に要らざる迷惑かくるも仁君の道ならずとあつて遽に御模様替道中の警固一切を略して御忍びにて

只今御入城一先づ豫て御休足の御場所へ入らせらるゝ相解つたか通る」

鞭聲肅々三騎は二の丸内なる定茂侯御休足所へ騎付けぬ、

其十六 城代家老

にはかに御模様替とあつて只今御忍にて御入城どの報は瞬くうちに城内一圓に傳り固より偽物の殿と知らねば何れも餘りに御手輕なるに肝をつぶしぬされど定茂侯の日頃より磊落にして萬づ物々しきを好み給はず而も性急にましましてソレと云はゞ何事にも待て暫しなきは知らぬものとてなればその舉動の輕々しきに過ぎたるを怪しむものさへなく借こそ例の

御氣象先づ我らの膽を奪はれしなれなぞ噂して城内上を下への混雑宛がら洪水の一時にぞツと押寄せ來りし如く我もく役目々々の用意に奔走敢ひぬ、御休息所に入りし兵庫は殿が鷹揚なる歩調を學びて悠然として設けの席につきぬ左右に従ふ郡平準太思はず眼を睜りて、われは日本八百萬の神々別して日頃信じ奉つる岩清水の八幡宮我らが忠義を嘉納ましまして衆人の眼を眩まし兵庫が偽物なるを覺らしめ給ふなど心中に祈りぬ御休息所は山崎四郎太夫の家來進藤嘉十郎といふもの下役を指揮して萬づを取賄ひ殿御出向ひのためとて伺候せし武士は何れも禮服の折目正し綺羅星の如く居列び中にも微小紋の麻上下着たる一際大兵の老躰衆人の中より進み出で、摺膝に此邊へ近寄り來りぬ、ソレと見るより群平は小聲に、

「城代家老山名肥前」

と兵庫に叩く時續いて又一人スルくと進み來る風情

「次は奥用人稻垣源藏」

兵庫は一々頷きながら飽まで殿に成り澄まして少しも悪びれたる處なし、

城代家老山名肥前はハツと平伏して、

「はッ若殿には何時とても御躰しう祝着に存まするまた本日御祝儀謹で御慶申上げまする」

呵しや彼は殿の眞偽に兎の毛の疑ひをも挟みぬ風情兵庫は何處までも鷹揚に而も馴々しく、

「お、肥前か汝も何時も異らずで芽出度い苦しうない近う近う」

「はッはッ然る處若殿へ申上げまするは山崎四郎太夫殿御傳

言

「む、四郎太夫が何とした彼め予が來つるに何を愚圖々々致し居る」

奥の殿が口癖に寸分違はず、

「はッ、はッ、恐れながら其事に御座ります、山崎殿には若殿餘りに過急の御着で、更にお出向ひの暇が、はッ、就きましては御儀式の場にて謹んで拜謁を得ます、此儀幾重にも御用捨下し置かれまするやうはッ、斯様に仰せられまいて」

山崎四郎太夫は殿と同じく當家に最も近しき親族なれば城代家老と雖も斯くは尊敬の言葉を御用ふるなり、

兵庫は軽く頷づきて、

「む、好的々々、四郎太夫の此處ヲ來すとも用は辨するは、はッ、ノウ源藏」

さて何たる大膽ぞや不敵ぞや、未だ一言をも發せず謹んで平伏したる奥用人稻垣源藏を此方より呼掛けし兵庫餘りの輕はづみに我も氣付きてハッと思へば、群平は青くなり、隼太は我にもわらで手に汗握りぬ、

されど源藏斯るべしとは少しも覺らず、殿よりの御聲が、りに恐れ入ると同時に此上もなき面目を施せし思ひ、

「はッ御意におざります」

彼は先づ斯くお受けして今日の祝辭を言上したり、

見れば源藏もまた殿の服物なるを見破りえぬさまに兵庫は稍と得意になり、さらぬも元來シタカなる膽力いよく据りて城代家老といへば先づ當家第一の賢者其れさへ難なく欺き得たる上は他は押して知るべし、此上は早や何人も恐るゝ處なし、此まゝならば案じるより生むが安く今日一日を過して見事反

逆人の四郎太夫とやらんに蟹の如く泡吹かしえむ面白し小氣
味よしとばかり勇み立ちぬ、
まだい〜に御慶をのぶる重役の武士に一々謁を賜ひ、兵庫は
是より衣裳を改めていよ〜本丸の儀式の場へ臨まんとはす
るなり、松原群平古曾部隼太の心裡は何れ先づ是までは無難な
りしも、是れは是れが地獄極樂の分れ道雨になるか風になるかと
二人が胸の雲は異しく立覆ひて少しも露れやらす、

其十七 天の神地の神

山名家の家督相續の儀式は先祖より不思議の規定あり、只見る
間口四間興行四間の板間には四面に七五三細打廻らし、正面の

壇上には荒菰を敷きて白幣を立て、神酒を供へ、神を立て、當家の
守護神正八幡宮を勧招しあり、左の壁には白鞘の一刀、右の壁に
は白羽の箭あり、束帯したる齋官は白幣を手にして、正面に突立
ち、家督相續者は純白の衣冠装束して、齋官の前へ進み、其時齋官
が御邊は當家祖先傳來の法規を守りて、仁主たるの道を盡され
うづるにて候かて、ふサも恐ろしく、左も嚴かなる間に答へて、天
の神地の神に誓ひて、答ふれば、齋官は重ねて、さらば御誓ひ候
へ、畏まつて候ふとて、彼は直に左の方なる一刀とつて、白鞘を拂
ひ、明晃々たるをリウ〜と、三度打振り、あはれ、天の魔地の魔神
の冥助と我等が劔の威徳に依つて、退散せよと、四方を切る真似
して、鞘に納め、次に右の箭をとつて、三度押戴いて、三度打振り、終
れば、齋官幣もて、彼を打拂ひ〜やがて、其幣を受取り、再び齋官
が國を治め、臣を撫するの上につき、一々詰問し、彼は一々其れに

答へ物凄きばかりの誓言を立て、式終るなり、此間席に列るものは最も近き親族二人と城代家老以下重役三人と限られぬ、式の模様は豫て群平より聞覚えし兵庫さわれ何程の事かあらんと思ひぬしもの、流石のシタ、カ者も餘りの神々しさに思はず肝つふれて眼眩みたれど、こゝぞ大事の場所と一生懸命城代家老山名肥前が指圖に従ひ辛くもつとめりぬ、式場には殿の怨敵當家の反逆人山崎四郎太夫も列しぬたり、
 さて其後さる程に兵庫は設けの一室に入りて暫しやすらひたる上此度は華やかなる大紋立烏帽子のいでたち天晴れ城主の貫目見えて悠然として大廣間上段の間に出でたり後邊には群平準太の兩人禮服の折目を正して謙んで侍座するさま何として、
 賈物の殿と思はるべき、
 家老格の山崎四郎太夫城代家老の山名肥前を初めとし左右に

ズラリと打并んたる當家譜代の郎等二百餘人はより新主君が御杯頂戴せんとて何れも威儀を正して畏まり満座肅然として宛がら水をうつたるが如し、
 賈物の殿はいかにも鷹揚に飽まで落着き拂つてデロリ、
 一座を見廻しぬ、山名肥前ユラリ席を進みて賈殿の方に平伏しなから、
 「今日の御儀式芽出度く相濟み御家運いよく長久臣等一同謙んで御慶申上げまする」
 兵庫は寛々として、
 「む、予も満足ぢや唯此上は何事も汝達の輔佐によつて領分の百姓町人が繁榮を望むのみぢや仁徳の帝が民の範は例にひくも恐れあれど民ありての國、國ありての君ぢや天下は一人の天下に非ず天下の天下なり予が意は是に他ないなけれども若

年の予ちや不徳不明の處は何處までも汝達補うてくりやれ」
抑や何たる賢明なる言葉ぞ是はこれ賈物の殿なればこそ斯く
も云ふなれ本物なれば逆もく群平は私には笑みぬされ
ど満座の家臣は一同感に打れて中には明君を得たる嬉しさに
泣くもあり、

肥前はハッと恐縮して、

「恐れ入つたる御錠臣等一同飽まで服膺の致します此上は、
一同へ御杯下し置かれませうなら難有き仕合におざります」

「む、杯持て」

兵庫は先づ心地よげに大杯を傾けぬ其杯を第一番に受くるは
席順として差詰め山崎四郎太夫なり、

「四郎太夫近う」

ニコリとして杯差出したる兵庫反逆不逞の四郎太夫元來如何

なる奴ぞと眸を凝して睨と見やれば彼は年は殿に二つばかり
若く髪薄く額廣く兩眼回みて底光のしたる見るからに一癖あ
るべき面だましひなり、

「はッ、はッ」

恐る／＼上段近くにヒリ出でし四郎太夫己が巧みし計略の齟
齟して殿の斯くてあらせられるに肝つふれてかあるは其殿の
瓜を割つたる如き賈物なるに呆れてか面色血の氣を失ひて土
の如く杯を受くる手は戦々ど打顫ひぬたり、

こゝまでは事破れずに首尾よく來りたるに今この場にて四郎
大夫殿を賈物と知らば一大事若しさる氣色の針の先もて突い
たる程も見えなば躍りかゝつて只一刺と小曾部隼太は息を呑
んで瞬きもせず群平も同じ思ひにや打沈みたる彼が面色は一
入打沈みて物凄さばかり獨り本尊の兵庫は一向平氣

は
れ
り

其十八 小書院

兎 男 僕

「いかにも不思議でならぬわ確にあの毒酒にわたつて九死一生の筈の定茂其れが那麽活氣として乗込うで来やう理ない但しは仕組うだ計略がはづれてか頼と早や合點がゆかぬわ狐に魅されたといふのは斯ういふのか裡にやられたのか……」
「恨然として太息し眉と眉との間にありくくと入の字を書きつゝ相手の顔を底光する鋭き眼にて睨と瞻りしは見るからに威儀堂々たる禮服のまゝなる山崎四郎太夫なり、
「はッ御意におざりませぬか、是には何か深き仔細のなうては叶はずされば此處よりは僅かに三里に足らぬ道程前に仰せ

兎 男 僕

を受けて駿馬に一鞭くれまししたる使者の者の最う程なう立版る頃でござれば兎角のことははッ詳しう知れまするで左までお心勞せられませす」
慰め顔に氣の毒顔に主を見上げしは四郎太夫が腹心股肱の家來近藤嘉十郎

「てもわらうかなれど若しあれが本物の定茂であつて見い明日は我等が身の上彼めに如何なる計略のあらうも知れぬ、されば此方でも其準備せでは一大事、事と品によらば高槻と山崎弓矢に問うても此一坪つけずばなるまいかめく敵のためには反逆人と呼ばれて誅せられうも能でないで、
彼は更に太き溜息吐きて、

「万に一つも彼男が賈物であつたらうならば其時こそは爲べき法もあるなれど」

「はッ、御意で、しかし殿服物と正物との區別、殿がお眼には入ら
ませぬか」

「ひ、汝が眼には入つたか」

斯く問ひ反されて嘉十郎は徒らに眼をバチクリ、恐ろしきばか
り見上ぐる大兵、其れが背を丸め、双手を支へ、天狗のやうなる高
き鼻に汗の玉宿らせ、厚き唇を結んで、赤銅色なる面皺めたるさ
ま烏羽僧正が繪巻物より抜け出せし奴か、つくねそこねし布袋
の土人形か、

「其れ見、汝にも分るまい、武術は五畿内に并ばうものなき、汝
智恵も才覺も相應にある、汝さへ此眞偽はシカと見極め難いで
あらう、況いて家中の武士が列坐の大廣間、威儀堂々たる場所
で見たばかりで何が分らう、聲も顔も何から何まで定茂ぢや、唯手
が一つの不思議と思ふは、日頃の輕走な定茂には似ず、何處やら

んに沈着のあつて、思慮分別の眉宇にあり、見ゆる處、何様疑
へば疑へもするなれども、人は其身の位に依つて見上げ見下さ
るゝと云ふで、定茂當城ナ城主になつたで、那麼なつたか」

嘉十郎は膝を刻んで、飽まで打沈んたる聲もて、

「若し正物の殿と相場が極りました節は、自躰甚麼と成されう
お心」

四郎太夫はキラリと兩眼を光らせて、屹と決心の色、

「云ふまでもない、先んずる時は人を制すぢや、事を設けて定茂
に近寄り、只一刀」

「なる程、うむん」

嘉十郎は唸るが如き聲を洩して、黒く醜き面をいよゝ醜くせ
しが、彼は忽ち、

「まかし殿其謀略拙でござる、其れよりは今の中に當城を抜け

出いて御領地サ御飯館小臣めは今宵の歡會にまぎれて單身與殿サ忍入り八重姫様盗み出いて後手より

「む、其れから何とする」

「はッ、最う斯うなりや是非もおざりませぬ、只一舉に當城を攻めて」

四郎太夫は首を左右に捻つて、

「其れも可えなれども、首尾よく當城を攻抜いて定茂めをない者にした上で、公儀へは甚麼と届けうぞ」

「さればで」

嘉十郎は閻魔大王こゝに唐辛を背め玉ひしやうの面にして口をつぐみぬ、

「其れぢやで成るべくは人知れぬ隠謀を用ゐてと思つた事も今は空ぢや、兎角は武士の意地、最う此上は萬全の計は望うで申

斐ない、何事も汝が頼みぢや有らん限りの事をやらうぢやまで、己が隠謀の斯くも合期せざるに呆れて、今は手負猪の狂人が如く捨身になりし四郎太夫嘉十郎は一旦退けられしと思ひし己が計略の用ゐられしに此度は得意になり、

「して若し膠物と極りまいたなら」

「其時こそは此方の者ぢや、彼めを謀反人と名付けて表向きに成敗さて其後は云ふまでもなく日頃の望み通り、」

主従密々と語らふは本丸殿中なる北向の小書院而も常盤木庭に茂りて何とやら湖暗さを幸ひ、こゝに一大事の善後策こそ講ずるなれ、

折しも廊下に人の足音して近づく風情に、二人はハタと口を閉ぢて何者と見やる眼先へ、

「お、殿こゝサ居らせられまいたか、只今戻りまいた」

百十四
はッど平伏せしは、殿の眞偽を確めんため、前に山崎の狩場へ急
行せしめし、臣下の一人、梶山傳六てふ武道にかけては聞ゆる剛
の敵、所謂山崎四郎太夫が四天王の一人として、嘉十郎もろど
も寵愛する腹黒武士、香四郎太夫がための忠臣なり、
「ひゝ早かつたぞ傳六何うぢや、疾う語れ狩場のさまを」
「殿の眞偽は、またお主の今仕て来た一伍一什」
主従左右より急立てたり、

其十九 從兄妹同士

さらぬも心地よきは春の夜なるに、況て新君御家督の儀式首尾
よう濟んだりと我も人も思へる高槻城内、秋平の聲は其處にも

此處にも湧くが如く、今宵の一刻は千金どころか、万金よりも優
れりと叫びぬ、
本丸の奥庭ふかく、廿三夜の月のぼるには未だ時ありて、晝なら
ば若葉うつくしき樹々の梢も、只物凄さばかりに黒く、怪物の臥
したるやうなる築山、其處には雪見燈籠の火かげのみぞ、明又滅
として、黒づんだる池の面へ、淋しき光を投ぐるのみ、宵より雨氣
を帯びたる空には、星かげ稀に、彼方の對の家、此方の廻廊など、に
は障子に映る人蔭見えて、露いかばかりや、置きけむ、茂樹が下に
は風もなきに、微けき物音の聞えつ、
斯る暗く淋しき中を、手と手を繋ぎ合せぬるにや、擦れつものつれ
つ小聲に語りながら、行く人影、兩個あり、憎や何處の誰が、人目を
忍ぶ戀の逢瀬ぞ、あらぬか、粹な木の下、闇は二人を構ひて、主は誰
ども見え分かず、

「む、去らば八重姫様には事の外の御機嫌と云はるゝか」
 聲は確に男なり、續いて聞ゆるは鈴虫の鳴くが如き優しの聲、
 「ほんに姫君様のお喜びは何に譬へて可いやら、御許嫁とは申
 しながら、是までは年に二度か三度御對面遊はしたばかり左程
 までも殿様を好い殿御とも戀しいとも床しいとも思し召さず、
 本の無心でおゐるで遊ばしたに、今日の御對面で姫君様はホ、
 、あのやうに瀧々しい神々しい情けらしい優しらしい殿御
 がまたと世にあらうかと、他の者には其様な事は夢にも御意遊
 ばさねと、妾と姫君様との仲はまた格別ゆゑ何事もお隠し遊ば
 さぬが習ひでござんす」
 「ほう、開は事の外大慶して姫君には御婚禮の日を何日頃とや
 仰せられまいたか」
 「さあ其れは流石に何日とも仰せられませぬ、しかしあの御機

子では一日でも半日でも早いがお望み思へば四海波しづかに
 諸ひおさめて殿様と姫君様内裏雜のやうにお并び遊ばすかと
 思へば妾はモウ、気が揉めて氣がもめて」
 漸次に奥深く進む二人男の刀の錆でか女の裙の觸りてか黒白
 なき闇の中よりさら、とばかり小笹の葉の戦々音あり、
 「女の口から此様なこと申せば、嘸はしたないものども、慎みの
 ない女ども思し召さうかなれと、今までは高槻と山崎ついで
 鼻の先でも逢瀬の首尾は少しも天下晴れて親の許した許嫁の
 身で何時まで此やうなことをしてゐるのでござんせう、是から
 は同じ御殿の勤めとはいへ、奥と表と別れて月に一度逢へる、か
 二度逢へるか其れさへ人目忍んで束の間心の娛樂、隼太様妾
 はモウ、辛氣で、」
 さては此男古曾部隼太と見へたり、女は逢へぬ怨みを啣てと、隼

太は今宵の群平兵庫等と打合せし計略を首尾よう仕遂げんとて又しても其れのみ思はれて無言となりぬ女は重ねて

「殿様と姫君様とが首尾よう御婚禮遊ばしたら今度は此方の順番一日も早う晴れて妻ぢや夫ぢやと……」

餘りに云ひ過ぎせしに女はハツと恥かしうやなりけむ其まゝ口をつぐみて聲なし一際茂き樹林の中より此態を見て妬ましくてや突然鶯鳥の聲はるく

「お、喫驚したごと」

女は男にヒシと寄添ひし風情

「天に口あり壁に耳ありこの暗夜に人は知らずと思ふたりや誤解間には一入眼の訝える鶯鳥が見てゐますわ」

「あれまわ妾が此様に氣を採んでゐまするにうはの空で、お怨めしう存じます」

知らず女などかしけむ準太は

「アッ痛うござる五臓は此様にデブ／＼肥太つてゐますが、血も通ふてゐるので、お手軟かに願ひたい」

「あゝ辛氣人の心も知りもせず、ほんに貴方様は」

「某がなんと致いた」

「知りませぬ」

「む、お知りやらぬ、お知りやらぬ」

また何事をか案じゐたる準太は何麻も氣のなき言葉女は張合の抜けてや是もまた稍しばし無言、彼方の御殿の方には燈火のかけ、二つ消え二つ滅て、二人が地を踏む静なる足音のみシトシトと響きつ、

稍ありて女は涙聲もて、

「準太様妾は、わたしはシミ／＼お怨めしう御坐んす、久方振り

百二十
 で此様にお逢ひ申してゐるに、何が御意に召さぬか、但しは他にお心の飛んでゐるのか、又しても人の言葉に空耳走らして、女が怨言は理あり、彼が這の女に向ふての今宵の舉動は、太く日比と異り居れるなり、這の女名は萩江とて、隼人がために親の許せし許嫁、而も從兄妹同士とて、振分髪よりの交り、淺からず、末は妻ぢや、夫ぢやと互ひに想ひつ、思はれつ、彼は八重姫君の御側附とて、高槻城の奥勤、是は定茂候の近從として、山崎の館にあり、相見る度は、少なけれど、心は常に、行通ひて、束の間も忘れしことなく、雨につけ、風につけて、想ひ合ひ、只管に晴れて、契らん日を指折り待ち居りしなり、
 二人が晴れて、契らん日は、定茂候首尾よく、高槻へ入城ありて、八重姫君と、鷺齋の襖の内ぞ、床しき後にあり、されば二人が希望は、早や近づきぬれど、實にや、花三日、三日見ぬ間の嵐のたどへ、是

百二十一
 は、只表面のみに現れたる、喜び、眞の定茂候は、入城どころか、今は山崎の狩屋に、毒酒にあてられて、現、他愛もなき人、今宵、隼太が群平、兵庫等と、謀し合せし、計略の首尾よく成就せずば、殿の御身は、甚だになり、ゆくやらむ、其れと同時に、隼太が身は、甚だなるらむ、彼は、今宵、兵庫の腰殿と、もに、當城を、抜け出し、兵庫と殿を、替へ來ること、この、万に一つも、仕損ずれば、生て、再び、人に見えず、は、思へるなり、されば、女々しけれども、日比戀しと思ひし、萩江に、他事ながらの、暇乞ひも、したし、また、一つには、八重姫君の、様子も、聞き、たしと、借こそ、今宵、上下の、喜び、狂ふ、ドサクサ、まざれ、人知れず、萩江を、闇の、奥庭、深く、呼出して、斯くは、忍び、逢ふ、なれ、殿は、廢物、思ふ、男に、斯る、必死の、企て、ありと、は、夢にも、知らぬ、萩江、男が、なんと、やら、浮々、せぬのみ、か、折々、己が、談に、空耳、走らす、こと、の、異しき、心地、して、男心に、秋の、空若し、や、今日、この、頃は、他に、増花

百二十二
 の咲き口惜しや其色香に心移りて、現在妾と斯うして手を取り
 ながらも猶その事の思ひ出でられ斯くも無情なく他事々々し
 きにあらすやなと戀には習ひの疑ひ女には有り勝ちの嫉妬の
 心のむらくと胸を衝いて口惜しくも有り悲しくも有り力ま
 かせに男の手をグイと引きてホロ／＼と熱き露
 我がためには行末の妻善にもわれ悪にもわれ我がなすことに
 は日ごろから露塵背かぬ女よしや誠を明けて語ればとて他
 洩すなどとはあるまじく男らしく尋常に今宵暇乞ひに來りし次
 第を述べ能く／＼納得させて別れんかと思し乍太いや待て暫
 し七人の子をなすとも肌身ゆるすまじきは女と聞くわづかの
 愛に溺れて迂乎と秘密を洩し方に一つも此女の口より大事去
 らば何とせむ我も古曾部乍太と人に知たれし武士なり何ぞ愛
 情の故もて國家の大事を忘れんや

斯く決心せし乍太は斷腸の思ひをヒツと堪へて可笑しくもな
 きに強て打笑ひぬ
 「は、は、は、愚痴は聞くまい、乍太は久々で御事の優しい聲嬉し
 い言葉其れ聞いて日比の胸の鬱氣を晴らさうとて参つたぢや
 に、呵しうもないさる事はお云やらぬものぞ」
 嘲るが如く叱るが如き男の言葉に、萩江は何と答もた、聲を香
 みて泣くばかり
 忽然傍の樹の陰よりぬツと黒き人影現れて
 「は、は、は、痴話も最う可え加減にせい夜も更けた殿もお
 待ちかねぢやに」
 素より小群なれども乍人が耳へは百雷の如く響いて
 「やア主は群平か」
 「時も時折も折さりとは餘りの氣樂さぢや、英雄の閑日月とで

も云は、先づ其れまでなれど、時刻もよいでな
「む、好的」
無惨や戀には兎角邪魔の入り易きもの、

其二十 樊噲の勇

山崎天王山の狩小家には、逆臣山崎四郎太夫が盛りし毒酒に酔
ふて夢現の巷をさまよひゐたりし定茂侯隙もる夜の山氣に襲
はれて不圖眼を覺し、初めて我に販りて四邊を見やれば、不思議
や身は會て見もなれぬ、惛悶き狭き一間に夜の物打被きて臥し
居るのみか、誰あつて傍に待するものもなし、
「こりや群平はぬぬか、隼太は何處ぞ、こりや隼太々々」

森々と更けゆく山しづかに四邊は閑寂として、片隅に置かれた
る短檠の火影はのぐらく梢わたる風の聲のみ物凄く聞えぬ、
さらぬも痲痺強き殿は此体にかッどばかり怒心頭を衝いてす
ッくと起上りしが、怪しや頭重く耳鳴り、ふらくと眩暈して胸
先苦しく我にもあらで撞と打倒れぬ、斯くても尙恐ろしき毒酒
にゐてられたりと覺らぬ彼は、再びッと起上りてハタ〜と手
を鳴らしぬ、

「こりや、誰ぞぬぬか、誰ぞ来い」
高々と呼ばゝる聲は瀾々と天地に響き渡つて、微に巖谷に應じ
ぬ、
程なく出入の戸の外に静なる人の足音して、聽てスル〜と戸
を開く者あり、
「群平か、誰ぢや」

殿は慌たしく斯くいふて屹と其方を見やりぬ見れば曾て見
なれぬ小兵男の眼ばかり光りたるが背を丸め首をすぼめ双
手を支へて殿の外に畏まり居るにいよ／＼不審と殿は眉打
て

「汝は何者群平は甚麼せし隼太は甚麼とした」

小兵男は恐る／＼頭を下げて

「ぬい下郎めは古曾部隼太の家來逸平と申しまするぬい／＼」

「ふむ隼太の家來逸平して隼太は甚麼した」

逸平は丸なる兩眼よりポロ／＼と涙を滾して

「さては殿にはまだ何事も知ろし召されませぬか」

「知らぬとは」

殿は稍々急込みたる体

「ぬい御身の上の御大事かざりまする」

いひつゝ彼はシリ／＼とにじり入りて極めて低き聲もて

「恐れながら上には山崎様御謀密にてド、毒酒に只今まで其
ため御昏醉遊ばされまいて」

「や、何といふ」

殿の眉はキリ／＼と釣上り兩の眼には怪しみと恐れと怨みと

憤怒との光を放つて我知らず膝を刻み

「毒酒さては前に予が飲うだ明國の紅酒あれに毒サ仕込
置いたといふか四郎太夫めが」

「ぬい御意におざります」

逸平は愈々聲を潜めて昨夜よりの一伍一什殿が毒酒に
あてられて昏醉の初めより毒を進めし女の事群平が事隼太の事兵庫
が事さては已が事まで残らず語りてホツと一息吐き

「でその兵庫様と仰せられまするが上の御代理恐れながら上

の賈物となつて昨朝疾う松原様と下郎め主人お供にて高槻サ御入城、今宵丑三つ頃には兵庫様これへ御歸り、其上人知れず上をお伴申して御城へ、どの松原様お手配でおざりまする、ねい、其れまでは下郎め、上を御守護致しまするで、殿の喫驚は大方ならず、さては山崎四郎太夫めが奸計に陥り、昨夜より今まで一晝夜の長きを夢裡の境にさまよひるたりしかど、思はず眼を睜り虹の如き大息はッ〜と吻き給ひぬ、逸平は小首を捻り指折りながら、

「今は亥の上刻近うおざりまするで、遅くも子の下刻が丑の上刻頃までには松原様より甚麼とか吉左右おざりませう、最早や僅の御辛抱、其れまでは逸平御守護申しまする、」

彼が忠義は自とその顔色に顯れ、よしや今如何なる大難事の降りかゝり來るもまゝよ、我に樊哈の勇なくとも孔明の忠もて君

の難に當り、三寸呼吸の根とまるまでは殿が身に指一本さゝすことならずてふ決心の色は、鈍栗の如くに丸き一種不可思議なる彼か兩眼の光に輝きぬ、折しも飽まで静けき夜の山をどはして、カッ〜と開ゆる鐵蹄の響殿は早くも聴耳立て、

「ひ、鐵蹄の音ぞ、あれ聞け逸平」

「ねい、いかにも、此處サ目ざいて二三騎駈付けまするやうで、」

「兵庫どやらが手を迎ひに來たか、但し逸平疾う斥候せい」

「ねい心得ました」

彼は身を翻へして駈出んとせしが、遂に立停りて聲せわしく、

「上には如何なる事のおざりまするも、此處サ寸も動かすに、油断はなりませぬ、若し敵ならば逸平め、い、命あらん限り上を敵の手サは渡しませぬ」

百三十
さても下郎に似げなき何たる健氣なる言葉ぞ殿は領き給ひて、
「むゝ頼母しい能うせい」

「心得まひた」

彼は素早く燈火に大息ふッと吹掛け黒闇々の中に殿を隠して
隔の戸びしやりと閉切り飛鳥の如く小家の外へ躍り出でたり、
雨氣を帯びたる天に星なく岩に激する谿流の音のみ高く春と
はいへど冷き夜の風は彼が頬を舐つて蹄の音はいよゝゝ近ま
りぬ、

其二十一 物置部屋

味方の小栗兵庫を初め松原群平古曾部隼太ならば可若し敵方

の殿をわやめに來りしならば百年目主人隼太の殿に誓ひし一
言反古にはならじ見よや逸平が腕の績かん限り命のあらん限
り何條定茂候を腹黒き四郎太夫めが手に渡すべきと逸平小兵
ながらも力足踏ん張り一刀の目釘をしめして屹と暗を睨みぬ、
されど逸平ゆめさらゝ事を好むものならずあはれ願くば其
蹄の音の敵ならで味方なれば殿の御身にも事なく我役も
滞りなく済むなればと宛がら今首を切らるゝ罪人が万に一つ
もと墓なき天の助けを望むが如く漸次々に近づく蹄の音を
數へながら心に祈りぬ、
忽ち四邊の闇を破つて彼方の木影よりバツと松火の光續いて
聞ゆる人の聲々、

「傳六抜かるな嘉十郎シカと頼うだぞ」
「御念に及びませぬ嘉十郎斯くてあらうづる中は假令敵にい

かなる計畧のおざらうとも」

「身不肖ながら鬼神と呼ばれまひた傳六見事定茂を引摺んで御見に入れうまで」

「傳六お主先づ先登せい某と殿は續いて」

「應合點ぢや」

町くやうなる小聲なれば山静なれば此方の逸平が耳にはヒン
くど聞えて南無三寶何事も今は空なりさては味方の計畧盡
く破れ山崎四郎太夫め殿を賈物と覺つて正眞の殿を引捕へに
か殺しにか來りしならひさわれ欺くだけは彼等を欺き見む定
茂候の御運芽出度く隼太の殿の武運盡きすば彼好等おめく
我言葉に欺かれて取つて返さじとも測られずる運は天にゆ
り當つて碎ける、
斯く考ふる間もあらせず敵は早や奔々と近づきヒラリくど

馬より飛降りぬ見るより逸平行方に立塞りて大音聲

「何者ッ」

「やア推參者め汝こそ何者これなるは山崎のお館ぞ無禮して
辨を得るな」

眞先に進みし山崎四郎太夫が四天王の一人梶山傳六先づ刀の
反打返して斯く叫びぬ、

「こりや其方は何者ぢや甚麼のために此處サまごく致し居
る御館のお成りとも知らず咎め立ては無禮であらう何者ぢや
名乗れ名があらう云へ」

いふは例の進藤嘉十郎なり何れも斯うと心に決する處やあり
けむ今日定茂候御入城の祝日といふに何事ぞ籠手腰當に身を
固め手にく松火振照したる奇怪のさまさてはどばかり逸平
胸先づおどつて必死の覺悟定めながら、

「ねい、下郎めは定茂侯御近従の武士古曾部隼太様に召使はれまする逸平と申しますもの、ねい」
 彼は片頬に笑を浮べ採手しながら敵に味方の動靜を覺られまじと殊更らに何氣なき体を装ひぬ、
 なれども悪人ながら智者と聞えし進藤嘉十郎何條逸平と云ふものに欺かるべき、
 「ほう、古曾部隼太の召使その召使が何用ばしあつて斯る夜陰に道の御小屋近くに徘徊の致し居るぞ御小屋には豫て御館より附けられある番人の居らう筈ぢやに」
 この一言には逸平思はず返答に詰りぬされど彼も去る者忽ち言葉を立てて、

「さればでおざりまする、主人隼太今朝定茂侯の御供して高槻サ登られまする前某に申されまするには、前夜より射てとつた

る小鳥多分にあれば汝は开を番して、今宵一夜はこの御小屋サ明し居れ身は滞りなく御城の御式を濟まいてから再び此處サ來て狩り暮さうで、斯うでおざりまするで」

皆まで云はせず四郎太夫はツカ／＼と進み出で、
 「黙れ下郎汝の云ふ處一々暗いぞ、さる小兒をたばかる如き偽り何條欺かれむ、さてこそ汝は隼太めが内命を受けて定茂殿を守護するど見えたれ、一癖あるべき面つきいづれ臆あるものと見込うで群平隼太が泥酔の殿を番さすると見ゆるわ、さあ定茂は何處に居る案内せい、疾う／＼案内せい」
 威猛高になつて叱する四郎太夫に續いて、傳六も同じく破鐘の如き聲ふり立て、

「日頃から鯨飲家の定茂侯は泥のやうに酔ふて道の御小家サ寢て御座らつしやると確に知つて來た我らぢや、論は無益疾う

／＼案内せい、四の五の吐さうが最後不慥ながら先づ汝が素ッ

首から引抜いてくれうまで」
斯くまで様子を知り抜かれては早や通るゝに道なしさりながら殿を隠せし一室は平素人の出も入りもせぬ物置所开を昨夜急に消めて當座の御寝所にゐてたるなれば四郎大夫等六つの眼は如何に輝かうとも正かに殿の物置部屋に在らせられうとは覺るまじさすれば矢張り御城に御座るが本の殿かど彼ら空しく手を束ねて取返すは定斯うなりや味方の勝利何も運試し、膽ヲ据えて夜探しさすべいと素早く胸に自問自答せし逸平けろりとしたる顔色にて、

「何ういふ事かは下郎め少しも知りませぬなれども定茂侯なりや今朝松原様また下郎の主人御供して高槻サ御越その他に定茂侯といふがあるなら知らぬが御小家は今朝から無人の境

ねい、閑子鳥が鳴いてゐますわ、論より證據嘘と思し召すなりや仰せまでもなく下郎め御案内のしまするで、すんど隅から隅まで御覽うぢやつての上へへへ、この素ッ首引抜かうとも斬らうども御意次第」

大膽不敵に云放つてイザとばかりに先に立つ逸平三人は思はず松火の光に顔見合して不審の眉

「此奴お小家の内には誰もぬど吐すが、さては群平隼太め深くも巧うで隠しをつたな」

嘉十郎は斯く咳きながらヨロリと主を見やりぬ、隠険なる彼が心は容易に逸平が言葉を信せざるなり、

「む、爾うぢや、兎角は家探しゝてからのこと、傳六定茂を見付けしだい、ふん縛つて館ッ」

「はッ如才はおざりませぬ、さあ下郎この松火持つて先に行け

逸 男 見

逸平を真先に、傳六嘉十郎、四郎太夫、黒漆の如く黒き夜の山を血の如く赤き松火の明に照して、狩小家の周囲は固より書院といはず、厨といはず、一々探し廻りたれど、殿の姿は愚更けし山家の夜は物静にして鼠一匹だも見當らず、逸平は占めたとばかり、その鈍栗眼を細め首をすぼめながら、心地よげに打笑ひぬ、

「へへへへへ、御覽うする通りで、御小家の内の隅々隈々人臭いものもおざりませぬ、斯くても逸平めが偽り申したと仰しやりますか、定茂の殿は今次高槻の御城で、夜半の夢でがなへへへ、」
彼が言葉は此方の三人が耳には甚麽も憎さげに聞えて短氣性急の傳六堪へかねて、

快 男 見

「黙れ下司めッ」
一喝して兩眼かッと睨りつゝ、さらに雷の轟くが如き聲もて、
「御館の御前ども憚らぬ無禮の言々、たとひ探める定茂侯は在らぬとも汝に偽りのなからうとも、今の無禮は宥し難い、其れへ直れ汝ぬッ」

今は手持無沙汰を隠す常座の方便否探ぬる本尊の見えぬ腹癒せ頭をなしに喚き立て、大刀ひねくり廻すを、進藤嘉十郎しばしと押しめて、
「いや待たれい、傳六今は此奴ら相手に去ることを争ふ暇ない、其れよりも不審は定茂侯の所在ぢや、我ら主従是程までに隈なく探しても見當らぬは、全く當御小家にはわらせられぬ、と他ならば思はうかなれど、進藤嘉十郎は左は思はぬ、尙我らが見残いたは、乾の隅の物置部屋疊ならば僅か四疊ほどより敷からぬむ

さう處ぢやが群平め殿を此處サ隠さぬとも云へぬ何は諸置さ
いでくその物置の詮議さ取りかゝらうぞ」

南無三一大事その物置部屋こそ正に定茂侯を隠し置く奥の院
こゝ開けられては逸平が主人に替ひし欲目立たず今は殿が浮
沈の堺逸平が命の瀬戸際と今しも其方を指して行んとする三
人が前へ逸平大手を展げて立ち塞がりつゝ、

「しゝ暫らくその御疑念サお道理でござりまするなれども苟
にも山名越中守ともわらせられ殿が下人もむさいと申す物
置部屋さ何としてなゝ何として」

さてこそくゝと嘉十郎はハタと彼を睨みて、

「思ひ中にあれば色外に顯る確に其所サ殿のわらせらるゝは
其方が面色にてシカと解めたぞ早や如何に陳するも無益退け
くッレ傳六」

「應心得た」

「やア飽まで我意サ張つて下郎が言葉を信とせられぬか匹夫
も志は奪ふべからず強てと仰やりますなら逸平思案がおさる、
御館にもわれ御歴々にもわれ主人の狩道具を入れてシカと守
る逸平息の根わらん限りこゝ寸でも前へは」

敵は早や我が本陣近く攻め寄せたり疾うく御用意あれど中
なる人に聞かせんとてや逸平破るゝ如き聲ふり絞りつゝ例の
圓らなる眼をいからして睨み付けぬ、

此方の三人は聲を揃へて、

「さてこそくゝ殿はその中に在らせらるゝに極つたぞさあ下
郎退け退かずば爲にならぬぞ」

「コゝ金輪奈落退きませぬッ」

争ひながらも敵の隙を見澄せし逸平今は早や是までなり運よ

くば今こゝで逆臣共を打斬り、運極くば死して役目を果しえぬ
主への申譯せんと、腰の一刀抜く手も見せず先に立つたる傳六
が二の腕の邊へズンと切付けたり、

「ヤッ推參ッ」

叫んで抜合せし傳六、驚く四郎太夫、嘉十郎も主を後邊に圍ひさ
まズラリと長刀引抜いてエイとばかり、宛がら電光の走る如く
さらに傳六目掛けて打込み來る逸平の眞甲深く切下げぬ、

「無念ッ」

かそろしき悲鳴と共に忠義に凝つたる逸平が五牀家鳴を立て
、掃と倒れぬ邊に起りし一陣の夜嵐さつと吹入りて松火の火
を奪ひ、闇は黒白なし、風は梢に浪の如く鳴り渡りつ、

其二十二 犬猫狼

「ちえッ邪魔者は首尾よく引導渡いてくれたが、斯う眞ッ闇で
は鼻つまゝれても分らぬか」

闇の中より舌鼓する傳六、

「應、其邊に如才はない、萬一斯ることもあらうかと燧石の用意
はチャンとして來たぢや」

いひつゝ、カチ／＼と暗黒の中より火を打出す嘉十郎、

「さても我がための張良陳平は嘉十郎ぢや、何時もながら殘る
限ない注意、満足ぢや」

四郎太夫が頻りに賞讃する間に、嘉十郎は難なく再び松火に火

を黙じ了りぬ、四邊は前よりも明く照されて、無惨や逸年が屍は

白き齒を噛みしめながら口惜しげ横はりぬ、

四郎太夫は屹と物置部屋の戸を覗みて、

「泥酔の定茂めタシカにあのうちぞ傳六其處開けし」

「心得ました」

固より望む處と慈悲も情けも知らぬ猪の如き傳六逸平に切られし二の腕より汁飴のやうに血汐の流れ出で、着たる衣をどはしてボトリ／＼と落つるを拭ひもやらす、殿が隠れ居給ふ物置の戸を曳やとばかり引開んとせしが、中よりは主の開けさせじと押へぬるにや、物も支へあるにや、引けども押せども開かばこそ傳六後ろを振返りながら、

「泥酔殿が押へてゐるゝで」

流石に躊躇ふを見て此方の嘉十郎は鋭き聲

「エ、最う斯うなりや五十歩百歩ぢや打壊して」

「む、好的」

應ずる聲もろとも傳六足を上げて撞と蹴付けぬ、大力に蹴られて戸はメリ／＼と打壊れ同時にハタと倒れたり、

「傳六殿を押へし」

烈しく命ずる四郎太夫、ツと松火差付くる嘉十郎、只見る定茂侯は荒鷺に掴まれたる小雀の羽翼まゝならぬ其れにも似て無念の兩眼いからしつゝ、

「尾籠ぞナ、何とする、退らう、退らぬかッ」

ハタ／＼と双足もて床を蹴りながら叫び給ひぬ、

「いかに定茂放埒無惨酒と狩に身を持くづして聖賢の教を重んせぬ身で、ようも山名家の家督相續する氣になられたのう」

くゞ見やりて

「は、は、無念おさるかの、萬づ世にいふ自業自得ぢや御分が身の程知つて尋常に初手から我らに譲つて御見やれ立派に一門の首座として山名家の筆頭家老として山崎の館は其まゝ御分に譲る而して我等は高槻で八重姫とは、は、其れを身の分サ願いで我らを差置いて高槻サ入城片腹痛うて物が云へませぬわ」

殿は一文字に口を結びつゝ、無念心外の涙持つ眼もて昵と四郎太夫を睨み詰め給ふ、

「さても恐しい眼サさつしやる、今は釜中の鮎袋の中の蟬ぢや、飛うでも跳ても睨んでも無益先づ物の道理サわかまへこれは、其器にあらすして其位を貪る、請りは民を虐ぐるか臣下の心を喪ふが落斯くては第一山名家のためでない、されば我ら君子の

道を以て聖人の徳を施さうため御分のやうな無道の君を廢して自ら民を撫する心で、些ばかり毒の入つた酒をまゐらせなぢや」

さりとは憎ひべき毒舌かな、一々聞く殿が心は甚慮思へばナレリ、と熱湯を濺ぎかけらるゝよりも尙辛かるべし、

「其の毒に酔うて寝て御座る間に、我ら事なら家督の儀式サ了らうと存じたに、何事素性も知れぬ異しい男を御分と名乗つて差向けられた、いや、是れは御分の指圖ではない、御分の家來松原群平めの細工さうな、さあ、斯う事六ヶ敷うなつては、氣の毒ではおされど、御分を其まゝに差置く事は出来ませぬわ、我らが館サ押籠めて置いて、其間に御分の賈物を誅罰し、さて其上で御分にも立派に引導渡いて進するぢや」

「エ、黙れ、犬猫狼ナ、何といはう、汝と身は從兄弟同士のな

れども八重姫殿父君の御鑑識によつて身が養子と定つたを、
 無道にも横取らうとは、人非人め、暫らく汝の悪運で斯うなら
 うとも天地神明も照覽われ、日ならずテ、天罰は汝が頭上に落
 ちやうぞ」
 血を吐く如き聲を絞つて叱し給ふ殿されど全身をめぐりし毒
 氣は尙去りやらず、舌は稍ふどちれて聲は少しく皸枯れたり、
 「む、曳かれ者の小歌とは其のさまぢや、何は兎まれ賸物の成
 敗終るまでは御分は殺さぬ」
 「何をッ、コゝ殺せ、見事殺し見よッ」
 足を上げて蹴付けん、と仕給ふ殿、傳六透さす其手を捻上げて、
 「エ、お静かに、お爲になりませぬで」
 「傳六疾う縛り上げら」
 四郎太夫は飛退ささまに叫びぬ、

「む、時刻移つては大事ぢやで、疾う〜」
 促す嘉十郎、惨忍なる彼等は何の用捨もなく、刀の下緒もて殿を
 ヒシ〜と縛めぬ、
 「さて何うしますべし」
 「エ、知れたことぢや引摺いで館サ、急げ〜」
 「む、合点ぢや」
 傳六殿を曳やどばかり、軽々と肩に引摺いで待たせし馬に、ヒラ
 リと飛騎りぬ、残る二人も續いてユラリ騎移り、
 「さお急げ〜、我らは尙こゝサ、残つて追付け来る敵を待受け
 う」
 ビューと鳴る鞭聲、豁谷に響く鐵蹄の音、満天の暗夜をついて淀
 川の方へ一文字、

其二十三 當座の談話

斯く素早く敵に計略の裏をかかれしと知らねば、高槻城内なる
 兵庫等は今日の儀式の場を首尾よく済ましたれば、いざ是より
 人目忍んで天王山の狩小家へ駈付け、正眞の殿を迎へ來らんと
 其準備とりくみなり、
 固より他人の入るを許さぬ本丸の奥殿、殿が寢室と定りたる一
 間に額をわつめて前後の手筈を深合す兵庫と群平、隼太、兵庫は
 正物の殿以上の貫目と威厳もて徐に櫛の上に坐しながら、脇息
 に双腕凭せて二人が言葉に耳傾けぬ、隼太は今の今まで絶て久
 しき戀人と打語らひし袖の移香なほ忍ばれてや、あるは今にも

山崎に向ひて事若し合期せずんば生て再び床し懐かしの其人
 に逢瀬の首尾もあらぬを打嘆きてや、日比の快濶なるにも似ず、
 大根の如く白く太りたる腕を拱き何とやら打沈みぬ、獨り群平
 のみは少しも平素と異らず、その打凹んだる眼中に爛々たる光
 を放ち廣き額を前に突出し、前後の策を指圖して餘す處なし、
 「自躰なら我ら兩人打揃うて行く處ぢやが爾うしてゐては肝
 腎の此處が氣がへりぢやで、隼太お主一人行てくれ、其處でぢ
 や、首尾よく殿の御供して此處サ引返すことが出来れば此上も
 ないなれども、寸善尺魔は世の習ひぢやで、う、万々一にも我ら
 の計畧破れた曉にはゆめ遠て、はならぬ、兎も角も小栗氏を伴
 うて再び此處サ引返して來い、其上の進退掛引は又の談合にせ
 う」
 隼太は堅き決心の色を眉宇に顯して、

「む、好的(よ)大概(たいたい)は事成(じじやう)就(じゆ)ぢやと思(おも)ふ」

「爾(なん)うぢや成就(じゆじゆ)せずば我等(われら)の大事(だいじ)第一(だいいち)小栗(こぐり)氏の首(くび)がコロリ續(つ)いて二人(ふたり)の首(くび)も覺束(おぼつか)なる」

兵庫(ひんぐ)はニコリと打笑(うちわら)ひて、

「事成(じじやう)就(じゆ)せずは此首(こゝくび)がコロリ首尾(くびび)よく成就(じゆじゆ)した曉(あけ)が其許(そのこ)等は殿(との)のか供(く)して當城(たうじやう)サ乗込(のりこ)ひ諸(もろ)その後(のち)が當家(たうけ)の大功臣(だいこうしん)なれども喃(なん)我(われ)らは何(なに)うぢや其(その)まゝ其許(そのこ)等に別(わか)れて再び(また)向(むか)ふ旅(たび)の空元(そらもと)の素浪人(すなうぢ)になつて頭(かぶ)に笠足(かさあし)に草鞋(わらじ)所詮(ところせん)算盤(そろばん)どつては勘定(かんど)に合(あ)はぬ難存(なんぞん)い仕合(しあ)せぢや」

是(こゝ)は彼(かれ)が洒々(しやくしやく)たる氣象(きせう)としての當座(たうざ)の談話(だんわ)ながらその言葉(ことば)こそ真(まこと)に穿(う)ちたるなれ世(よ)には聽(き)て來(こ)ん身の榮華(えいげ)を願(ねが)うて大博奕(だいばくあ)い打(う)つ不敵(ふてき)者の數少(かずすく)なからねど事成(じじやう)れば元(もと)の空阿彌(そらあみ)成(な)らずは二つと掛替(かか)りな大事(だいじ)の首(くび)を持つて行(い)かるゝてふ古今(ここん)無双(むさう)世界(せかい)に

例(れい)すくなき斯(か)る大博奕(だいばくあ)い打(う)つ白痴(ばか)者(もの)またどあらうか詰(つ)りは兵庫(ひんぐ)にして初(はじめて)めて成(な)し能(よ)ふ一事(ひとこと)なれば當座(たうざ)の談話(だんわ)ながら耳(みみ)を聴(き)く群平(ぐんへい)隼太(すんた)は思(おも)はず顔見合(かみあ)せてホット一息(ひといき)

「なれども其道行(そのみちゆき)が誠(まこと)に面白(おもしろ)い世(よ)の中に此位(このくらい)面白(おもしろ)い仕事(しごと)またないわのう松原(まつはら)御分(ごぶん)とは未(ま)だ昨今(けふ)ぢやが肝膽(かんたん)相照(あ)して此(こゝ)やうなことをやるは妙(たぎ)ぢやわい」

今敵中(いまてきちゆう)へ飛入(とひい)るといふ身(み)も何處(いづこ)までも悠々(ゆうゆう)と語(かた)らふ兵庫(ひんぐ)が不敵(ふてき)さ大膽(だいたん)さに隼太(すんた)は呆(おろ)れて眼(め)を丸(まる)めぬ、

群平(ぐんへい)は眉(まゆ)を擡(た)めて、

「固(こ)より此様(このよう)な仕事(しごと)は損徳(そんとく)づくで出來(で)るものではござらぬ何(なに)は兎(う)まれ最(さい)う時刻(じこく)ぢや急(いそ)いで山崎(やまざき)サ」

「は、愈々(いよいよ)御出馬(ごしゅま)あらせられるかの」

徐(じゆ)に起上(おこ)る兵庫(ひんぐ)罷(ま)り進(すす)へば曉(あけ)の鐘(かね)をも待(まち)たで散(ち)るべき身(み)の神(かみ)

色自若として少しも變せねば、この膽力わつてこそ初めて猛火の中にも飛込まれて、群平はいよいよ頼母しく、

「兎角は云はぬ、何事も御分が力ぢや、御分が一舉一動は残らず常山名家の盛衰興亡に干はるで」

「云ふにや及ぶ我らの首にも干はるでの」

カラ／＼と笑ひながらも流石に命の瀬戸際一世の大事兵庫は一種の光を眼中に放ちぬ、
隼太も同じくツと起上りて、

「さらば群平後のこと能う頼うだぞ、たゞひ甚麼なる大事があらうとも明日の朝いや我らが戻るまでは何人も此家サ入れぬこと、如才はあゝるまいなれど」

「ひ、勿論ぢや、此處の事には心残さず充分にやつてくれい萬一のことあつた時は、小栗氏を此處サお供して來ること忘れぬ」

やう、よいか」

いひつゝ、額越に尻と見上ぐる群平、見下す隼太、小兒の時から我ら二人は始終殿のお側につきさうて飯を食ふにも竹馬に騎るにも、二人は片時離れたこともないに、今宵の山崎行ことによれば此まゝ、再び顔見ること出来ぬ最後の別れにならぬとも限らぬ、思へば武士は嫌男は辛いものと口へ出しては云はねと思ひは同じ眼と眼に通ひぬ、殊に群平よりは一段情に厚き隼太は堪らず、我知らず眼中に浮ひる一雫、

「此一期の大事ぢやに、時刻移らぬ中に疾う／＼」

友の涙を早くも認めし群平、他聞を憚かる小聲ながら斯く叫びて、我も堪へかねて手にせる扇子さつと打開ささまヒタと顔に押當て、差俯きぬ、折しも夜半をつくる時の鐘、滿城の静けさを破つて陰々と響互りつ、

其二十四 敵の伏勢

兎 男 俵

夜半過ぎなば月昇るべき日どりなれど、雨氣を帯びたる空に光
 一点もなき今宵の闇を折柄の幸ひとして、城の内外は蟻の穴ま
 でも知り抜いたる小曾部隼太を先導として後門より築垣乗越
 え堀を渡りて城外へ忍び出でたる小栗兵庫今來し方の闇を透
 しながらホッと一息吐きぬ、隼太は着たる衣の水を走らせつゝ、
 人や聞くと大事を取りて聲ひそめ、
 「此處まで來るが骨ぢやが、最う是からは盲目も迷はぬ三里足
 らずの道程、たゞ一足飛ぢや」
 「む、少し時刻移つたで急がずばなるまい、某には此邊の道は

兎 男 俵

不案内なれば」
 兵庫も同じく裳裙の水打残りながら潜め聲
 「なわに譯はないついで一走りぢや、しかし首尾よう殿が彼のま
 ゝでゐらせらるれば可えが」
 「御昏醉のまゝでか」
 「爾うぢや既に醒させられても敵に見出されずに」
 「世の中のことば案じた程のものでない、大概は我等のもの先
 づは急ぐに如すぢや」
 「ム、其通り」
 人目厭へば態と松明は點さず、スツといふ折の用心に飽まで身
 輕にいであちたる兩人闇の繩手道を息をもつがずにヒタばし
 り、今朝來し山の麓を宛がら宙飛ぶが如く、先を急げば小休みも
 せず、時に我知らず曳々聲を發して村を過ぐれど、更けし此邊の

田舎家とて燈火の影さへなければ怪しむものもなく二人は些の故障もなく程なく天王山の狩場近く來りぬ。さあ是から先が地獄極樂幸いと甘い分け道軍太は幼き頃より仕へし三代相恩の主のためよしや敵のためにもんと計策の裏をかゝれて再び飯らぬ道に遣遣らるればとて弓矢八幡怨みはあゝまじけれと兵庫は素是れ旅から旅の一浪人山名家に露ばかりの恩なく定茂に些の由縁もなきに我から進んで眼前の死地に陥らんとするは抑も何たる愚さぞされど彼が稜々たる一片の俠骨は斯る物の道理を顧るに暇あらずあはれ人の國の將に亡んとするを憐み人の命の今にも断れんとするを救はんとして何處までも最初の一諾を重んじて斯くは虎臥す岩窟へ躍入らんとはするなり是れを真個の武士の龜鑑といはずして何をか云はむ是れを真個の大和魂といはずして何をか云はむ

事むづかしく云へば先づ斯うなれど兵庫彼自身の心裡には夢にも斯る事は思はざるなり彼が軍太と共に死地に馳入るは釣魚を好めるものゝ風を恐れず海に漕出づるが如く螢を追ふ小兒の池に陥るを知らざるが如く夢我夢中盲目滅法面白半分に猛進するなりされば彼が心には今宵の必勝は期すれど万一の危きを願す否危きは知らざるにあらねど彼が不敵の本性は非を左まで危しと思はざるなり。天は黒く地は黒く山は黒く森は黒く一目只是れ黒闇々として奈落の底にあるが如き中にハタと立寄りし軍太と兵庫。「さあ最う此處まで來れば城からの追手もあゝいはいはぬ」は山路谷路所詮火光がなうては一步も叶はぬ。いひつゝ軍太は手早く用意の燈石探り出して携へし松に火を点じぬ黒き一道の煙は漸次に赤みを帯び來り、パチ／＼パチバ

チと豆を炒るやうなる音して煙薄らぎ真紅の焰火は炎々と燃立ちぬ芝居の黒幕の切つて落されたるが如く山現れ立木見え岩嘯き煙薄らぎ谷吼え二人が行方は明々と照されぬ其れと同時に岩に激する水の音にもあらず枝と枝とすれあふ風の音にもあらず一種不可思議の聲は二人の耳に入りぬ

「ヤッ待て〜彼の音」

兵庫は手をわけて先に立つ隼太を止めて

「たしかに草掻分けて地を踏み人の足音」

隼太は小首を傾げ聴耳立て

「ひえ若しや敵の」

「今頭猪の出づる時節でもないさすれば山犬か狼か其れにしても二匹三匹の足音でないさては味方の計略敵にもれて」

「たしかに敵の伏勢ト、殿の御身氣遣はしい」

「エ、膽ヲ据ゑて行く處まで」

二人は屹と眼と眼と見合せ一刀の鯉口しめす間もあらせず、鑿もて削れるが如き岩の陰大蛇の空に嘯く如き樹のうしろ谷の狭間山の折曲りより黒の頭巾もて面を包み手に〜得物携へたる者共一人出で二人現れ見る間に十餘人となりて此方の二人の前後左右より追つ取圍み、きつと籠燈提灯さしつけたり

其二十五 飛彈の工匠

ソレと見るより武道にかけては隼と唄はれし古曾部隼太真正面の敵に向つて手にせる松明發止と投付け、一刀抜くより早く振被つて肥太つたる五躰を躍らせ

「フ、無禮者め、一々念佛云へやッ」

獅子の吼ゆるが如き聲は森々と更けゆく夜の山に響いて物凄
し、敵は不意を喰つて颯と左右に飛退き、一應二應の問答はある
べき筈と思ひしに、さつても氣早き奴かなと呆れて抜合すをも
打忘れ、

「やアヌ、抜いたぞ」

「ム、抜いたナ、抜いたナ」

「生擒れ」

「打斬れ」

徒らに空騒ぎして我正面より立向はんとするものあらず、其間
に井太はエイ〜とばかり一人を斬付し、一人に重手を負はせ、
漸く抜連れ来る一同を相手に縦横無盡に暴れ廻る其働きの物
々しさ

斯る過急の折柄にも前後を分別するの餘有ありて少しも騒が
ぬ小栗兵庫何時の間に敵の圍みを脱けし、崖をつたひ樹の根
に縋り、宛がら峯より峯にうつる猿猴の如く、昨夜心覺えに覺え
たる狩小家の方へ急ぎぬ、

彼は素より隼太の危難を見捨て、己が身の安全を計るにはわ
らで、隼太が身よりも甚慮よりも當の本尊なる定茂侯の安否こ
そ氣遣しけれど、焦眉の急に處して緩急輕重を測り、闇中より星
の如く見ゆる一點の火光は、タシカに狩小家と暗き足元危険な
る山路を物ともせず、

山深き春の夜ながら額より鼻の頭さては背といはず、手足とい
はず玉のやうに流る汗を拭ひもやらで、腰にも足にも擦傷い
くつかをうけながら、辛くも小家へ駆付けたる兵庫、屹と四邊を
見やれば、内より燈火の光微にもるゝのみにて、山しづかに風死

して人の居るべきさまも見えず、借こそ殿の身いよ／＼氣遣ひなれど、一文字に床の上へ躍り入れば、不思議なる哉己が足の響につれて、何處よりともなく、忽然として起る牙えたる太鼓の音、死せるが如くに寂寥たる山々谷々に反響いて、響々と鳴り亘りぬ。

「やわッ」

平素はいかなる事にもピクともせぬ不敵の兵庫ながら、この奇怪なる出来事に、南無三寶さては敵の術中に陥つたかど、我知らず叫んで跳出んとする時、

「待てやつ」

山も崩れよとばかりの大喝と共に、正面の襖さつと開きて躍り出でたる見上げるはかりなる大兵の武士一人、

「やア奇怪なり、小二才、元茂侯の賈物となつて高槻城ヲ乗込ラ

だは其方か、山崎四郎太夫の殿に、四天王の一人と頼まるゝ岩淵甚内宗清、疾うより其方を待受けたわッ」

聲は洪鐘の鳴互るが如く、夜目には一入恐ろしげなる髯黒々の面櫃大抵のものならば、道の音聲この物どしに、忽ち肝を抜かれ、一も二もなく尻込みするなれど、最早や深く巧みし敵の術中に陥りし上は何かあらむ人に頼まれたる一事を、首尾よく成就せしめざるのみは無念なれど、その代りに此命一つ無きものとせば、万事終るなり、天下また甚麼東西か、恐るゝ處わらんやど、兵庫はピクともせず突立つたるまゝ、冷き笑を片頬に浮べて、甚内を見やりつゝ、

「ほう某を待受けた、何用ばしわつてか知らぬが、大義ぢや」

何たる不敵の一言ぞ、これには流石の敵も眼を丸めて早速に書葉を出しえず、兵庫は更に疊みかけて、

「たゞ可笑しさに堪へぬは兒戯に等しいからくり仕掛某が今この床を斯う踏んだりやドン」と太鼓が鳴つたずると主がヒョクリと飛んで出た真に不思議や飛彈の工匠が聞いて呆れるからくりや自体甚座のためか先づ其れから開きたいで喃」

ますく出で、益々沈着きたる嘲弄の言葉に先づ敵の荒肝を挫いて而して後難なく生擒らんと巧みし計畧ながら反つて相手に荒肝抜かれて岩淵甚内眼を白黒させながら、

「エ、吐いたな小二オッ、其様な講釋する口持たぬわ兎角はいふな其方が身はモウ袋の鼠ぢや飛べばとて跳ればとて手もなう生擒つて山崎の館サ素引いて行く其れから後は殿の御自由殺すも生すも我らの知つたことでないゑいッ」

彼は猿轡を差伸べて兵庫が二の腕ムツと掴みて引寄せんとす、

其力量の強さ兵庫思はず痛みを感じて眉間に皺打寄せしが、「ゑい放せ無禮者」

一振りふりたる柔術の精妙に甚内難なく振放されて己が力餘りてヨロ／＼とばかり开を得たりと付け入る兵庫おはや刀の柄に手を掛けんとする刹那兵庫が双足踏ん張りたる床板たれども知れず下より持上る者ありこれには不敵者も堪らず思はず足をどられて挫と倒るゝ其時此時前より小蔭に隠れて此方の合圖を待受けぬたる者共にやあらむ五六の武夫バラ／＼と駆來つて倒れし彼が上に折重りぬ、

「エ、助くな跳るなッ」

手どり足どり無惨や難なく兵庫に入重繩かけたんぬ、

「ム、占めた／＼ッ合圖」

合圖とは何者への合圖にやあらむ甚内が指揮につれて再び起

俠 男 兒

俠男兒終

る太鼓の音

著者曰、あゝ、俠男兒は終に敵の虜となり了んぬ、隼太は何ぞし、定茂の生死は如何、城に降りし松原群平は何ぞかすらむ、五巴と入乱るゝ奇談は、やかて俠男兒後篇として讀者の御見に入れむ。

明治三十六年九月二十二日印刷
明治三十六年九月二十七日發行

不許複製

發行所

東京下谷中根岸町五十四番地
電話番號下谷二千七百〇七番

弘文社

著者

稻岡正文

發行者

江原豊治

印刷者

多田榮次

印刷所

東京市神田區小川町壹番地
合資愛善社

俠男子傳附
定價四拾錢

弘文社發行圖書大賣場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場
東京●丸●東●目 所 大 賣 場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場
東京●丸●東●目 所 大 賣 場

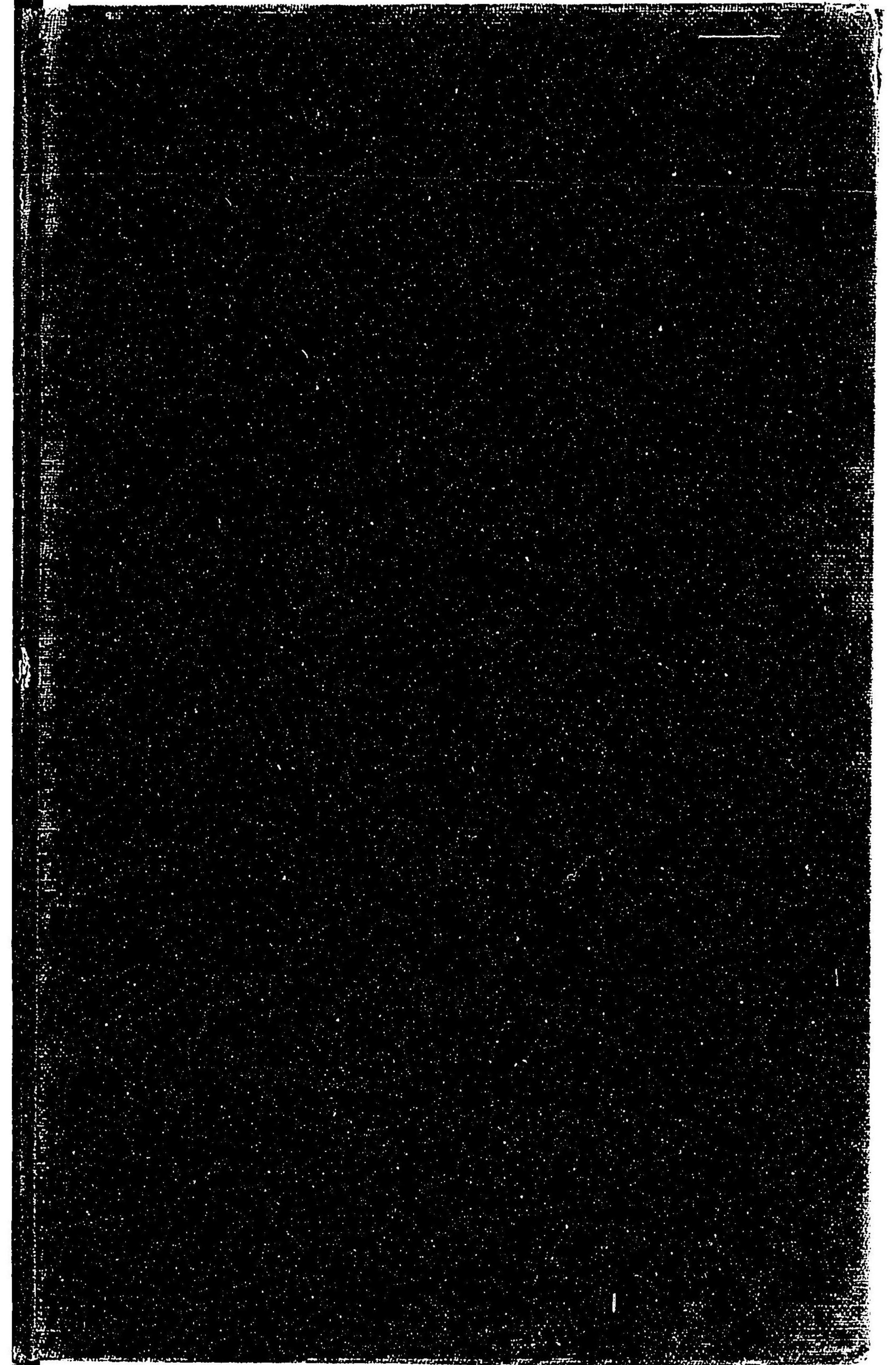
東京●丸●東●目 所 大 賣 場
東京●丸●東●目 所 大 賣 場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場
東京●丸●東●目 所 大 賣 場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場
東京●丸●東●目 所 大 賣 場

東京●丸●東●目 所 大 賣 場
東京●丸●東●目 所 大 賣 場

77
235



093462-000-6

77-235

侠男児

稻岡 奴之助 / 著

M36

DBQ-0833



